

修農九十年

2018

鳥取県立農業大学校修農会

鳥取県立農業大学校

修農九十年

目 次

校旗、正門

清明寮寮歌、校歌

農業大学校創立90周年を迎えて……………鳥取県知事 平井 伸治 1

90周年を迎えて……………90周年記念事業実行委員会長 横川 力 2
鳥取県立農業大学校修農会長

創立90周年にあたって……………鳥取県立農業大学校長 小林 智子 3

学校の現況……………5

各コースと研修科の概要……………11

創立90周年に寄せて……………17

ともに農業による若者の育成を……………鳥取県立倉吉農業高等学校長 田中 正士

次代を担う農業経営者の育成を目指して……………鳥取大学名誉教授 小林 一

創立90周年に寄せて～思い出あれこれ～……………第19代校長 下中 雅仁

経営伝習農場の思い出……………経伝第9期生 小司 勝美

農業に夢を描いた学校へ!!……………経大第1回生 山田 恵子

農業大学校に学んで……………農大第1回生 寺道 一郎

農業大学校での思い出と感謝……………農大第23回生 河岡 誠

学校の思い出……………農大第34回生 徐 漫容

写真で見る校舎・設備等の変遷……………25

開校直後の大学校

平成9年全面大改修以前の大学校

平成9年全面大改修後の大学校

現在の大学校

写真で見る最近の10年間……………33

10年間の卒業生

10年間の風景

沿革……………45

① 開校と変遷

1 山陰国民高等学校

2 県立修練農場

3 県立経営伝習農場

4 県立農業経営大学校

5 県立農業大学校

② 年表……………50

会員名簿……………77

農業大学校修農会役員

現職員

旧職員

卒業者数と卒業生

創立90周年記念事業実行委員会……………94

編集後記

校 旗



正 門



清明寮寮歌

〔修練農場、経営伝習農場の
時代に歌われた寮歌〕

黎明告ぐる とりの声
 眠りを破る 太鼓の音
 高原の空 明けゆけば
 真理のひかり 仰ぎつつ
 朝日を浴びて 同胞の
 共に繁栄を 祈るなり
 御国のさかえ 担わんと
 心を磨き 技を練る
 暁の風 背に受けて
 大きな体を 鍛えつつ
 今日一日に 幸あれと
 健児競いて 奮いたつ

校歌

山下 清三 作詞
 牧野 晋 作曲

一 はるかに仰ぐ 大山の
 希望に燃ゆる この明日
 ああ ひらけゆく 農業の
 大地をふみて 若人が
 世紀の道を 今すすむ
 これぞ われらの
 これぞ われらの
 栄えある農業大学校

二 ゆたかにみゆる 高原の
 かなたにしづく 日本海
 ああ 青春の 手をくみて
 種子まく人の 新しき
 真理をたずね 今すすむ
 これぞ われらの
 これぞ われらの
 栄えある農業大学校



農業大学校創立90周年を迎えて

鳥取県知事 平 井 伸 治

本校の礎は、昭和4年、将来のリーダーとして指導的役割を担う農業後継者の育成を目的とし、地元有志の手により、財団法人山陰国民高等学校として、関金の地に開かれました。その後、全施設が鳥取県に寄付され、昭和9年に県立修練農場として再出発し、以来開拓増産修練農場、経営伝習農場、農業経営大学校、農業大学校と発展の歴史を重ね、多くの皆様の御協力を賜り、この度90周年の輝かしい節目を迎えることができました。同窓生の皆様、関係者各位からこれまで賜りました数々のご支援に対し、衷心より感謝申し上げます。

全国で3番目、西日本で最初の国民高等学校に始まる長い歴史と伝統をもつ本校は、いつの時代にあっても鳥取県農業の発展・振興に寄与すべく、人材育成に努めて参りました。平成9年には、施設の全面改修と併せて「国際農業交流館」を新設し、農業分野における環日本海交流の一躍を担う農業研修施設としての活動を本格化させ、鳥取県と友好交流関係を結んでいるモンゴル中央県などからの研修生を数多く受け入れ、本校で学んだ野菜生産技術等が海外でも普及するなど、国際貢献の拠点ともなってきました。

農業の担い手を拡大するとともに移住定住にも役立てるため、平成20年から高校卒業者に加えて養成課程に社会人特別枠を設け、研修課程に短期研修科を開設することとしました。これにより、社会での経験を持つ就農希望者が本県農業に進む道が大きく開かれていきました。更に、平成27年に全国に先駆けて開設したアグリチャレンジ科は、公共職業訓練として、トラクター等の農業機械操作等を習得し職業としての農業にはばたいていく人材を育成するもので、鳥取県ならではの農業研修のあり方を確立してきました。

昨今、本県の農業は、大きく転換しつつあります。これまで右肩下がりだった農業産出額が増加に転じはじめた。この機運をとらえて「農業生産1千億円達成プラン」を策定し、それぞれの産地で将来を見据えた担い手を育て、生産拡大に果敢にチャレンジし、農家個々の所得向上を図る挑戦に打って出ることになりました。さらに、農業を取り巻く情勢が激変し農産物市場の国際化が進む中、グローバルGAPやスマート農業の推進を図るべく、農業大学校も貢献していかなければなりません。

単に耕作技術を学ぶだけではなく、国際感覚や経営能力をも備えた「たくましい農業者」の育成に向けて、本校の歴史と伝統を基礎として、90周年の節目を新たな出発点として、果敢にチャレンジしてまいります。

結びにあたり、本県農業の限りないご発展と、皆様方のご多幸をご祈念申し上げます。



90周年を迎えて

90周年記念事業実行委員会長 横川 力
鳥取県立農業大学校修農会長

鳥取県立農業大学校の90周年を迎え、お祝いを申し上げます。

本校は、昭和4年2月22日、財団法人山陰国民高等学校として開校されました。当初は旧赤碕町の農林水産省種場所跡地を候補地としていましたが、入手が難しく、陸軍演習跡地であった関金町のこの地で、先生と生徒が起臥寝食・農作業を共にしました。

昭和9年、国は中堅農業者の育成を目的として各府県に県立修練農場を設置することとし、山陰国民高等学校は全施設を無償で県に寄付し、県立修練農場として発足して16期、その後県立経営伝習農場17期、県立農業経営大学校16期、県立農業大学校34期と変遷を経て、90周年を迎えました。

私は、農業大学校の3期生として卒業し、果樹と水稲の複合経営を行っています。

当時を振り返ってみますと、入学式の田中道宣校長の式辞の中で「授業は7割、実習3割」とありましたが、実際は逆であり、いろいろと苦労したと感じます。しかし、この経験が農業をしていく上で役に立っています。それは、仕事をしている時、学生の頃いろいろ教えていただいた事が頭の中によみがえってきて、行き詰まった時に励みになっています。

私は、東郷果樹研究同志会の会員で、毎年試験研究をまとめて発表していますが、学生の頃に教えていただいたことが今でも役に立っているのです。

我が家の農業経営の柱となっているのは梨生産であります。梨づくりの締めくくりとなる収穫の際には、当時教えられた「喜び」と「反省」と言う言葉を思い出します。1年間汗水流して作ってきた果実を収穫する喜びと、中には小玉や病気などになってしまった果実に対する反省で、翌年の栽培につなげていきたいと思えます。

農業大学校では現在、先進農家実践研修、スキルアップ研修（長期12ヶ月、短期4ヶ月）、アグリチャレンジ科（公共職業訓練）など、新たに農業を目指す社会人向けの研修も行っており、養成課程以外でも即就農に繋がる体制が整っています。就農を考えている方には希望が持てる教育施設だと思います。

最後になりますが、この90周年記念事業の実施・記念誌の発刊にあたり、同窓生並びに農業大学校の旧・現職員の皆様には、多額の御寄付を頂戴し、誠にありがとうございます。

鳥取県立農業大学校の益々の発展と同窓会の皆様の御活躍と御健勝を祈念しまして、発刊の言葉といたします。



創立90周年にあたって

鳥取県立農業大学校長 小林 智子

地域農業の担い手や農業農村の指導者を育成するために、本校の前身である山陰国民高等学校が昭和4年2月22日に全国で3番目の国民高校として開校されました。その後、修練農場、経営伝習農場、農業経営大学校を経て、昭和59年に現在の農業大学校が発足してから35年となるとともに、創立90周年を迎えました。開校当初からの「農場実習を基本とし、実践的な農業技術、経営能力を習得する」教育理念は変わることなく引き継がれており、農場のあちこちに実習に励む学生、研修生の姿を毎日目にすることができます。

一方社会情勢は、少子高齢化による日本の人口減少が急速に進んでおり、農業、農村では耕作放棄地増加や地域農業の担い手不足が深刻となっています。このような中で農業の持続的発展に向け、担い手への農地集積・集約化や農業の法人化による経営の安定効率化が進んでいます。また、グローバル化する農産物流通や多様化する消費者ニーズに対応するために、GAP認証などによる食の安全性確保、6次産業化による新たな価値の創出などが求められています。

本校では、未来の農業を担う人材育成に向け、時代の変化に即応したカリキュラム改正、グローバルGAP認証取得、先進農家等に学ぶ授業導入、食の6次産業化プロデューサー育成講座開設などを行ってきました。

新規就農を目指す社会人を対象とした研修課程では、関係機関、生産組織等と一体となって現場ニーズに即した幅広い研修を企画実施し成果をあげています。公共職業訓練「アグリチャレンジ科」、就農予定地に関係機関、生産組織などによる就農サポート体制づくりをしたうえで研修を開始する「先進農家研修」、県主要品目の基礎技術を学ぶ「スキルアップ研修」などです。

国際交流では、平成10年から継続してモンゴル研修員21名の研修を受け入れています。この取組が施設導入などによる野菜生産拡大に貢献したと評価され、平成29年4月にモンゴル中央県から本校へ名誉勲章が授与されました。そして、多数のモンゴル研修員が12月1日の創立90周年記念事業式典に自らお祝いに来てくださることとなり、大変感激しています。今後とも末永く農業交流の強い絆が結ばれることを心から願っています。

これまでの卒業生は延べ2,655名となり、その多くが本県の地域農業をけん引され、いつの時代も生産組織や地域リーダーとして活躍されています。この節目に、修農会の皆様のご尽力により本校の歴史を刻む記念誌を発刊されますことは、次代に向けてエールを送る大変意義深いことと感謝いたします。

新規就農者育成、次代に即した農業人材育成、食農教育など農業の根幹となる人づくりに果たす農業大学校の役割の大きさを再度認識し、栄えある歴史を重ねられますように一層の精進をして参りたいと思います。

終わりにになりましたが、同窓生、旧職員並びに関係各位の多大なご後援に感謝申し上げます、今後益々のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

学 校 の 現 況

1 教育目標

養成課程では、次代の農業を担い、指導的役割を果たし得る人材を養成するとともに、農業者等の研修を行い、もって農業の振興に資するため、農業に関する高度な知識・技術及び近代的な農業経営を実践する能力と、農村社会の発展のために必要な広い視野と社会性を培う。

研修課程では、就農に必要な知識と基本技術を実践的に教育し、研修修了後即就農できる人材を育成する。

2 教育・研修制度

1 養成課程

教育期間 2年

教育課程 第1学年 1年間在校

第2学年 11ヶ月間在校、1ヶ月間農家等留学研修

専攻コース 果樹コース、野菜コース、花きコース、作物コース、畜産コース

入寮制度 学生寮への入寮を希望する者が入寮する希望入寮制とする

学年		月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 学年	講義	農業全般基礎学習						専攻別基礎学習						
	実習	基礎的栽培実習						プロジェクト実習						
2 学年	講義	専門学習(流通、販売、経営)				農家留学研修 (26日間)			<ul style="list-style-type: none"> ・総括学習 ・卒業論文 ・農業経営計画 					
	実習	プロジェクト実習												

2 研修課程

社会人等新たな就農希望者を対象に、就農に必要な知識と基本技術を実践的に習得する。

(1) スキルアップ研修

- ①研修の特徴 栽培実習を中心とし、栽培や農業経営の知識および技術を習得する。
- ②教育期間 長期研修（1年間）、短期研修（4カ月間）
- ③開講時期 長期研修（4月、10月）、短期研修（4月、6月、7月、9月、3月）
- ④専攻 果樹、野菜、花き、作物、畜産

(2) 先進農家実践研修

- ①研修の特徴 就農予定地の先進農家のもとで農業の実践ノウハウを習得する（派遣型研修）。
- ②教育期間 1年間
- ③開講時期 6月、10月、2月
- ④専攻 就農部門

(3) アグリチャレンジ科

- ①研修の特徴 農業の基礎知識と実践に生かせる基本技能を学ぶ「公共職業訓練」。
- ②教育期間 3か月
- ③開講時期 6月、10月、2月

3 教育方法

1 養成課程

(1) 第1学年

〈農業全般基礎学習〉

- ・入学後から7月下旬までの4か月間は、講義・実験・演習により基礎的科目を履修するとともに、全員実習を通じて基本的な栽培管理技術を習得する。また、この間に専攻作目の基礎的技術の習得と併せ、農業の各分野にわたる技術・知識を習得する。

〈専攻別基礎実習〉

- ・9月から専攻コース別に2年生と共に実習を行い、専攻コースの本格的な実習とプロジェクト学習を開始する。

〈講義等〉

- ・前期は農業基礎学科の講義・実験・演習を修得し、後期は専攻別の科目を修得する。

(2) 第2学年

〈専攻別基礎学習・プロジェクト学習〉

- ・9月までは学生の自主性を活かしながらプロジェクト学習を進める。
- ・学生が自主的に組み立てた栽培計画により、各作物等の栽培管理を行う。また、個別に設定した課題を解決する学習方法を通じ、専門的な知識・技術を習得する。

〈専攻別総括学習〉

- ・10月以降はプロジェクト課題をまとめるとともにその内容を深め、卒業論文としてまとめ、1月中旬に発表し、清書・提出する。

〈講義等〉

- ・流通、販売、経営を中心とした専門学習を行い、農業経営における専門的な知識・技術を習得し、ビジネス感覚の養成に努める。

〈農家等留学研修〉

- ・7月下旬から9月までの間に26日間の先進農家等で留学研修を行い、農業経営、農家生活への理解を深め、就農時の経営計画作成や地域の農業振興に対する意識を醸成する。
- ・研修の受入れ先の選定にあたっては、本人の進路の意向を踏まえ、地域・経営形態等を考慮し、決定する。

2 研修課程

(1) スキルアップ研修

- ・野菜および花き専攻の場合は、個別に担当品目を設定し、施肥設計、栽培管理、収穫・調整・出荷等の一連の作業を経験し、就農計画作成演習、農家実習等を等を通じ、実践力を習得しながら就農イメージを固める。
- ・果樹、作物および畜産専攻の場合はグループ形式により専門知識・技術の学習を行い、就農計画作成演習、農家実習等を等を通じ、実践力を習得する。

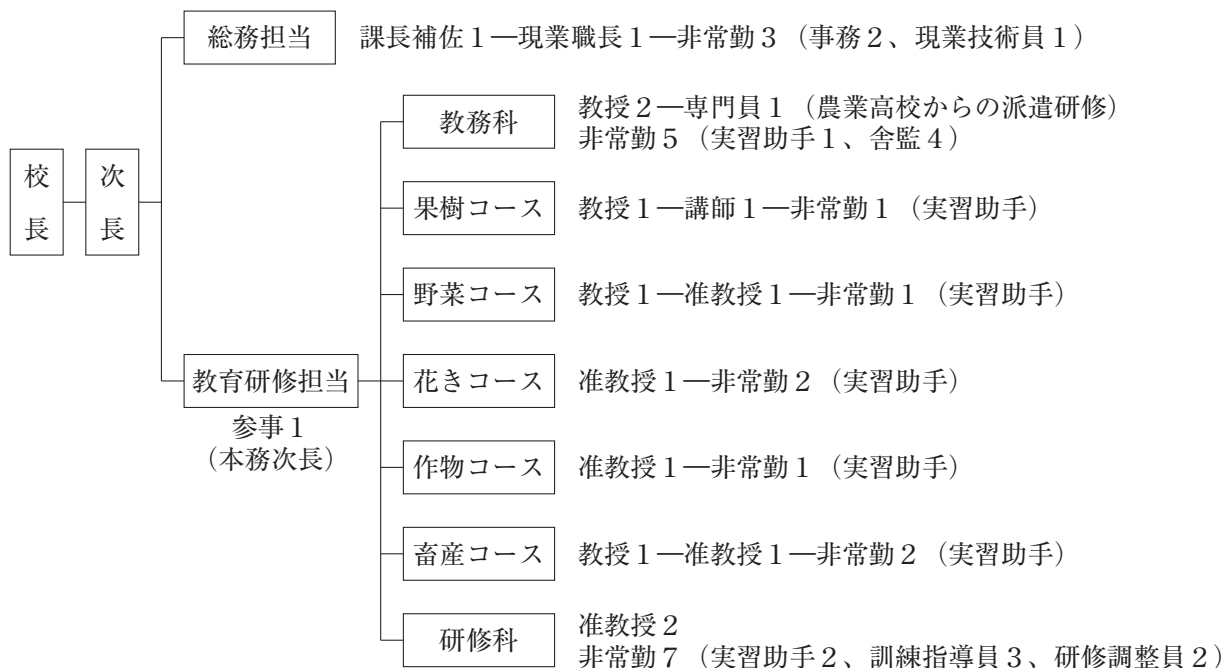
(2) 先進農家実践研修

- ・就農希望地域において、就農品目の栽培に係る実践技術と経営ノウハウを先進農家からマンツーマンで学ぶ。

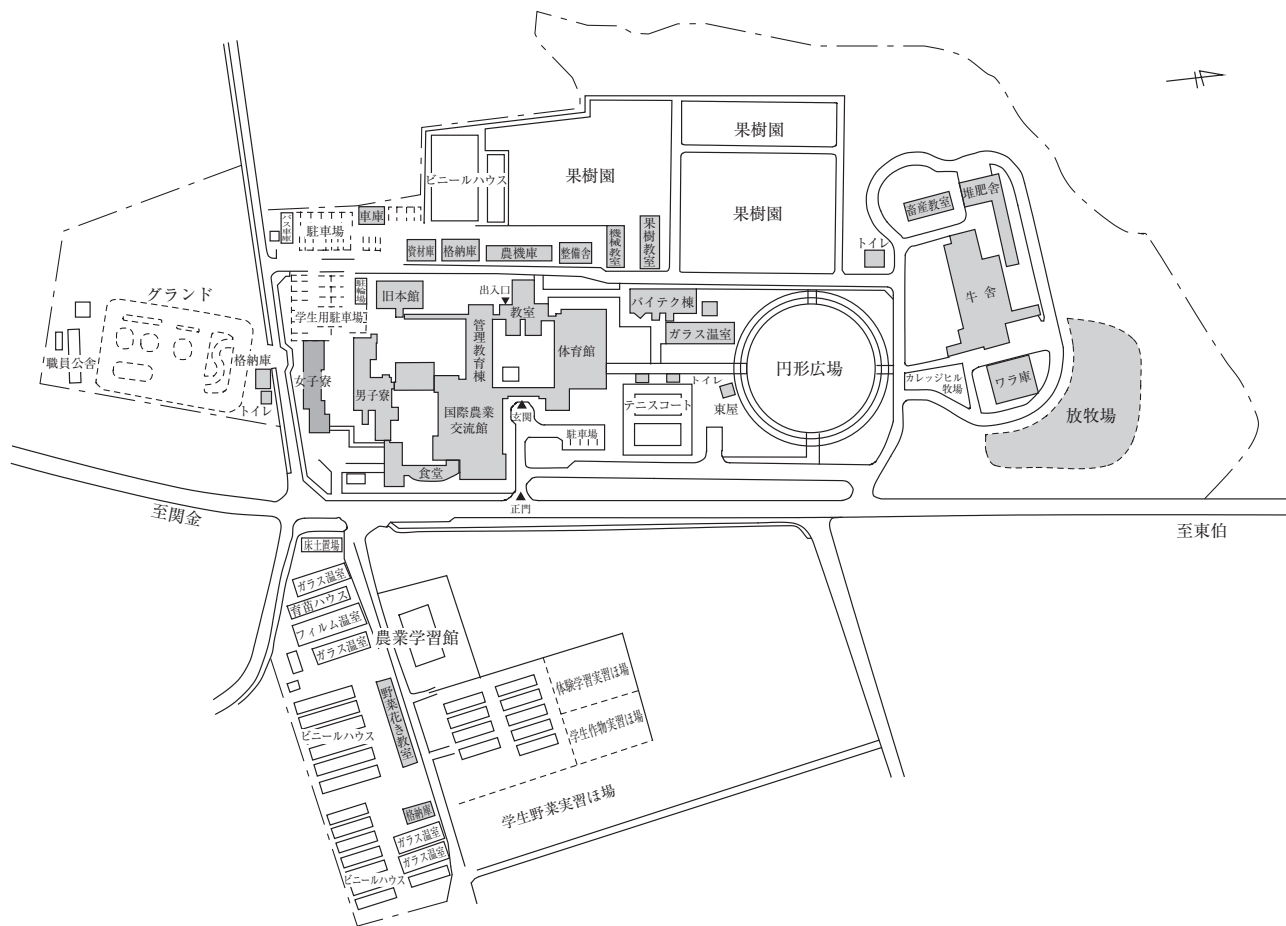
- ・就農に向けた農地や作業場の確保、中古機械の調達、住居の世話等各種支援を地域ぐるみ、農協生産部全体で実施することを基本とし、各関係機関とともに作成した「新規就農サポート計画書」に沿って、個別の就農支援を行う。
 - ・公共職業訓練「アグリチャレンジ科」を修了する等、農業の基礎知識・基本技術の習得者が対象。
- (3) アグリチャレンジ科
- ・座学、技能演習、栽培管理実習で構成し、全研修時間の6割を技能演習とする技能習得を重視した研修。
 - ・技能演習では、トラクターの操作と耕耘、作業機の脱着とロータリー爪交換の方法、刈払機の取扱い、管理機の取扱い、フォークリフトの操作、農業機械全般の保守点検方法、燃料の基礎等機械操作・点検の習得を行うとともに、小農具の扱い方、肥料・薬剤散布のポイントを学ぶ。
 - ・公共職業訓練であり、求職者で公共職業安定所長の受講指示、受講支援又は支援支持が得られることが前提。

農業大学校組織図

平成30年4月1日現在



農業大学校見取図



施 設 の 概 要

平成30年4月1日現在（単位：㎡）

区分	施 設 名	面 積	備 考	
建物施設用地	管理教育棟、学生寮、体育館、食堂、 現場教育施設、整備舎、格納庫、資材 庫、グラウンド、バイテク施設等	52,331		
	国際交流館、円形ひろば、機械室等	7,808		
	計	60,139		
農 場	果 樹 科	建 物 施 設 用 地	234	現場教室、資材庫等
		ハ ウ ス （ ぶ ど う 等 ）	1,280	ピオーネ、シャインマスカット等
		青 な し	2,110	ゴールド二十世紀等
		赤 な し	4,190	新甘泉、秋甘泉等(防蛾灯及び網掛け施設)
		か き	1,050	富有、西条等
		り ん ご	680	ふじ等
		そ の 他	1,240	モモ、ウメ等
		(小 計)	10,784	
	野 菜 科	建 物 施 設 用 地	2,489	現場教室、農機具庫等
		ハ ウ ス 用 地	2,128	鉄骨350パイプハウス1, 350ガラス温室428
		露 地 畑	3,000	転作田
		(小 計)	7,617	
	花 き 科	建 物 施 設 用 地	2,488	現場教室、農機具庫等
		ハ ウ ス 用 地	1,465	パイプハウス1, 125ガラス温室340
		(小 計)	3,953	
	畜 産 科	建 物 施 設 用 地	6,737	畜舎、運動場、ワラ庫、堆肥舎
		牧 草 ・ 飼 料 作 物 畑	42,992	
		牧 草 ・ 飼 料 作 物 田	24,596	
		牧 草 ・ 飼 料 作 物 田	18,783	(借地)
		牧 場	8,000	
		(小 計)	101,108	
	作 物 科	水 田	100,000	(借地)
		(小 計)	100,000	
	研 修 科	建 物 施 設 用 地	932	農業学習館
		ハ ウ ス 用 地	600	パイプハウス6棟
		研 修 用 実 習 ほ 場	2,772	作物、野菜、花き研修用
		全天候実習ハウス(タスコドーム)	228	雨天時の農作業実習用ハウス
(小 計)		4,532		
そ の 他	いこいの森、急傾斜、未利用地	10,821		
	(小 計)	10,821		
	計	238,815	(借地を含まず：120,032)	
そ の 他	道 路 ・ 水 路 等	13,710		
	合 計	312,664	(借地を含まず：193,881)	

各コースと研修科の概要

【果樹コースの概要】

- 主要な落葉果樹（ニホンナシ、ブドウ、カキなど）を栽培管理している。
- 栽培面積は約1haであり、このうちナシの面積は約60%である。
- 本県育成のナシ新品種（新甘泉等）や本県と農研機構が共同育成したカキ新品種（輝太郎）を計画的に導入している。また、消費者からの人気が高いブドウ・シャインマスカットの栽培も行っている。

1 ナシ『ジョイント仕立て』の取り組み

本県育成の新品種「新甘泉」「秋甘泉」等で、ナシ樹の新しい仕立て方である『ジョイント仕立て』に取り組んでいる。



研修生による人工交配実習

本校での「ジョイント仕立て」の栽培管理実習をとおして、将来的に自立就農を目指す学生及び研修生は、就農前に本仕立ての疑似体験行う事ができ、また自身のナシ経営へのジョイント仕立て導入の適性を検討・判断する事ができる。



学生によるジョイント作業

2 『6次産業化』への取り組み

果樹コースで生産される果実を使用して、ジャム等の加工品製造に取り組んでいる。

平成28年度は、学生のプロジェクト学習として、規格外となった桃を使用した「桃ドレッシング」を製作し「農大ブランド」として認定された。



ドレッシングの試作



「桃ドレッシング」完成品

【野菜コースの概要】

野菜科では鳥取県で栽培されている主要品目である、スイカ、白ネギ、ブロッコリー、トマトを中心として栽培実習を行っています。

また、将来の鳥取県農業の担い手となるために、栽培管理能力の習得だけでなく、経営感覚に優れた農業者となるべく農産物の販売をとおして市場原理、消費者の購買行動の把握等についても習得を進めている。



1 ガラス・硬質フィルム温室

大玉トマトの暖房には、二酸化炭素削減効果の高い木質ペレットを燃料とした「ごろん太」を活用し、学生への二酸化炭素排出削減意識の醸成を進めている。

今後の日本農業は野菜工場化が想定されていることから、施肥および灌水の自動灌水システム、ハウス温度による自動換気システムの管理技術を習得している。



2 ビニールハウス

鳥取県内で使用されている一般的なビニールハウスを活用してスイカ、ミニトマト、イチゴ等の栽培実習およびプロジェクトを実施している。



3 露地

白ネギ、ブロッコリー等の鳥取県で栽培されている主要な露地品目について実習を行っている。



【花きコースの概要】

鳥取県花き栽培技術指針(平成19年3月発行)に掲載されている品目を中心に、ストック、シンテッポウユリ等の切り花、ペチュニア、パンジー・ビオラ等の花壇用苗物、シクラメン、サイネリア等の鉢物を栽培実習している。

また、生産品の出荷先は主に近隣の直売所で、切り花、花壇苗等を組み合わせながら、農業大学校の花が途切れないように販売実習を行っている。

1 鳥取県花き品評会の参加（平成28年10月）

- ・出品したシンテッポウユリが評価され審査員優秀賞を受賞。



2 「花育」活動（平成29年2月10日 倉吉市立関金保育園）

- ・花きコースでは、単に栽培だけでなく、学生が先生となり自ら栽培した花を幼児に紹介と寄せ植えの方法を教える「花育」活動を実施。幼児は花を親しむ機会となり、大変好評です。



花の名前・特徴を説明



配置を考えての植栽指導

3 新技術の導入 二重空気膜ハウスの様子（左：通常ハウス、右：空気膜ハウス）



○メリット

- ・保温効果上昇。
- ・暖房コスト低減。
- ・比較的風に強い。

○デメリット

- ・雪の時に屋根部分に雪が溜まりやすく、また、落雪しにくい。
- ・家根を膨らますため、常にモーターを回し空気を送る必要あり（電気代アップ）。

【作物コースの概要】



作物コースでは、水田営農の基幹作物である水稲を中心に栽培実習を行っている。また、転作作物として大豆、小豆の栽培実習のほか、H26年から白ネギ、ブロッコリーなどの野菜類の栽培実習も取り入れている。

水田は11筆（約1.7ha）を使用しており、学生が1人1筆以上を責任持って管理している。

実習では、播種、育苗から耕うん、代かき、田植え、除草、防除、収穫、調製、出荷までを行う。

作業実習は播種機、トラクター、田植機、コンバイン等の機械を使用し、機械の操作方法のほか、効率的な作業手順などを習得する。

また、栽培管理を通して施肥や水管理ポイント、病害虫の特徴及び防除方法を習得する。



有機栽培技術に興味を持つ学生も多く、チェーン除草、紙マルチ栽培、アイガモ農法など有機栽培技術を導入した栽培管理も行っており、実際の栽培管理を通して有機栽培のメリット・デメリットを実感しながら技術習得を図っている。

農業法人への就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い、白ネギ（秋冬）やブロッコリー（秋冬）の栽培実習を行っている。

また、農産物の加工実習も行っており、販売実習の一環で開催される農大市では「もち」などの加工品を製造販売している。



【畜産コースの概要】

畜産科は、肉用牛である「黒毛和種」と乳用牛である「ホルスタイン種」を飼養管理し、飼料用作物も栽培管理している。

1 肉用牛部門

- (1) 繁殖雌成牛10頭、育成雌牛5頭、子牛2頭

子牛飼養管理や繁殖技術に関する試験を実施して農業後継者を育成しています。

先端技術の受精卵移植等を活用した育種改良にも取り組んでいます。

- (2) 第11回全国和牛能力共進会宮城大会（2017年9月）に本校の雌牛「はちこう号」を女子学生（2年生）が雌牛を調教して出場しました。その結果、群出品区で全国第4位を獲得しました（右から2番目が本校学生と「はちこう号」）。調教による牛の行動制御技術の向上を目指しています。



2 乳用牛部門

- (1) 搾乳牛10頭、乾乳牛1頭、育成雌牛8頭、子牛2頭

搾乳は3頭を同時に搾乳するパーラー方式です。

子牛飼養管理、繁殖技術及び産乳成績向上に関する試験を実施して農業後継者を育成しています。

様々な機械操作の機会が多いことから、適正で安全な操作ができるよう指導しています。また、和牛と同じく調教による牛の行動制御技術の向上にも取り組んでいます。



【研修科の概要】

- 社会人向けの就農研修制度を運営
- 就農に必要な基礎知識・基本技術から実践スキルの習得まで、体系的な研修により、研修生一人一人の就農をサポート

(1) 公共職業訓練「アグリチャレンジ科」

- ・年3回、各期定員25名で募集、運営。現在までに約150名の研修生を受け入れ。
- ・主に、農業機械の操作方法等の基本技能を身につけるための、約4か月間の短期集中訓練。
- ・研修生の就農率は、8割以上を占める。



(2) 先進農家実践研修

- ・地元機関及び生産部によるサポート体制のもと、就農予定品目に関する実践技術、経営ノウハウを農家のもとで習得する1年間の派遣型研修。
- ・アグリチャレンジ科を修了する等、農業に関する基礎を有する者を対象に実施。
- ・現在までに6市町にて10名の研修を実施。各産地の主要品目（スイカ、長いも、トマト、白ねぎ、アスパラガス、梨、芝等）の栽培管理技術を習得し、全員が各地で就農するに至っている。



(3) スキルアップ研修（長期研修（12ヶ月間）・短期研修（4ヶ月間））

- ・就農予定品目の一環した栽培管理技術を習得する校内での研修。
- ・12ヶ月間の長期研修では、作付計画の作成、資材選択、圃場管理、収穫調製、収支決算・分析までを行う「模擬経営」を実施。4ヶ月間の短期研修では、主要野菜品目（スイカ、白ねぎ、ブロッコリー、トマト）の栽培管理の基礎をグループ実習により習得。
- ・長期研修は年2回（年間定員15名程度）、短期研修は年5回（各期定員5名程度）で運営。



創立90周年に寄せて



ともに農業による若者の育成を

鳥取県立倉吉農業高等学校長 田中正士
鳥取県高等学校長協会会長

鳥取県立農業大学校が創立90周年を迎えられることに、心からお祝いを申し上げます。

さて、鳥取県の農業を取り巻く環境はかつてないほど厳しいものがあります。若い就農者が少なく高齢化が進み、そして後を継ぐ人のいなくなった耕作放棄地が広がっています。我が国の食糧自給率が長期的に低下傾向である中、若い農業者を育てるといことは、我々農業教育に携わる者の喫緊の課題です。

こういった現状を受けて、本校と農業大学校とは3年ほど前から「スーパー農林水産業士」の制度創設に向けて協力をしてまいりました。この制度は、知事が先頭に立って、鳥取県農林水産部、鳥取県教育委員会、鳥取大学農学部、農業大学校、県内の農業高校が、一体となって本県の農業を支える人材を育てるというものです。農業高校で農業の基礎技術をしっかりと学び、さらに農業大学校や鳥取大学農学部で、さらに研究を深めたりマネジメントを学ぶことで、鳥取県の主要産業としての農業を支えることのできる人材を育てるといシステムです。昨年度に3名の農業高校生（倉吉農業高校1名、智頭農林高校2名）が認定を受け、知事から直接認定証をいただきました。それぞれの進路は、鳥取大学農学部、農業大学校、森林組合と、この制度の目的にかなった「金の卵」が誕生しています。この先も多くの若者が認定されることを願ってやみません。また一方では、悲願であった農業大学校から鳥取大学農学部への編入の第一号が誕生しました。まさに鳥取大学農学部、農業大学校、農業高校が三位一体となって県内の農業の人材を育てる仕組みが作り上げられたと思っています。この仕組みを活かして、この先多くの有能な人材を育て、農業によって、「農業県・鳥取」の発展を成し遂げて欲しいものと期待しています。

大学教授や企業経営者からなる「日本創生会議」の人口減少問題検討分科会が、平成26年に「2040年には全国1,800市区町村の半分の存続が難しくなる」という予測をまとめて発表しました。また、国土交通省も全国6割の地域で2050年には人口が半分になり、さらに2割にあたる地域では住む人がいなくなるとしています。鳥取県でも平成20年には人口が60万人を割り込み、2030年（平成42年）には50万人を割り込むという推計が出されています。このことを証明するかのように、若い世代が県外の大学に進学し、そしてそのまま県外で就職して帰ってこない現象が続いています。このまま手をこまねいては、やがて鳥取県に人がいなくなるかもしれません。

「農業」こそ、鳥取県の未来を決定する大切な要素となり得るものです。そしてそのなかでも大きなキーワードが若い世代の農業人材育成です。それこそが我々農業教育に従事する者の使命だと思っています。この先も農業大学校、農業高校、鳥取大学農学部、県農林水産部、県教育委員会が一体となった取組が求められます。

全国的には農業を舞台として、特に6次産業化した分野で、地域の核となって活躍している農業法人や農家が数多く見られるようになってきました。本県でもこのような人材を育てていかないと、鳥取県の未来は輝いてきません。倉吉農業高校と農業大学校、いつまでも強いチームワークで、ともに農業の未来を目指したいと思っています。



次代を担う農業経営者の育成を目指して

鳥取大学名誉教授 小林 一
放送大学鳥取学習センター所長

学校創設から90年の歴史を刻み、今日の鳥取県立農業大学校として発展を遂げてこられたことに衷心より御祝辞を申し述べます。この間、地元鳥取県を中心に大勢の卒業生を輩出し、地域の農業・農村の発展に貢献してこられた社会的意義は誠に大きく、慶賀の至りに存じます。小職が、本学の学生教育に関与したのは、平成11年度から15年度までの4年間に過ぎません。しかし、農業情報処理学の授業を通じて学生諸君と交流し、ささやかながら農業後継者の育成に寄与することができたことは誉れです。

農業経営研究を専門とする小職にとって、農業経営実態調査は研究推進のための欠かせない手段です。そのため、これまで全国の農業生産現場を歩いて実に多くの農業者と交流させてもらってきました。その折、農業大学校を卒業して活躍しておられる農業経営者とお会いした機会は数えきれません。農業に対する強い問題意識と深い愛情を持ち、地域リーダーとして活動しておられる姿は、農業大学校の卒業生に対する共通した印象です。

全国の農業大学校には、農業経営の担い手を養成する中核的な機関として、社会的使命が与えられています。現在の農業大学校卒業生が農業経営の後継者として就農する割合は、以前に比べて低下しています。とはいえ、雇用就農や関連産業従事を含めると、依然として農業界に対して大きな貢献を果たしています。これからの農業大学校が、高等学校等の新規学卒者ばかりでなく、多くの社会人を入学生として受け入れ、農業・農村に向けて有為な人材を輩出して、いっそう大きな貢献を果たされるよう期待するところです。

小職は専門を生かし、これまで農業経営管理に関する夜学校を設けて、農業者と共に学んできました。夜学校は、日中の農作業を終えた会員が集い、農業経営管理について学ぶ自主的な学習の場です。鳥取県では、平成3年から活動を行ってきましたので、ともに学んだ農業者や改良普及員の方々は多数に上ります。そうした農業者との交流の場で、農業経営者として成長するための理念を掲げることの重要性を、会員との共通認識としてきました。

日本農業を巡る環境条件は混沌としていて、これからも農業経営に関わる経営条件は厳しく変化することが予想されます。農業経営が困難に直面したとき、羅針盤の役割を果たしてくれるのが農業者の掲げる経営理念です。何を目指して農業経営を行い、経営行動を通していかに自己成長を遂げるのか。こうした考えをまとめた経営理念のもつ重要性を、多くの篤農家や精農家との交流の中から学ばせていただきました。

農業大学校の在学生在が学舎で学ぶのは短期間です。しかしながら、鳥取県立農業大学校には優れた教官や教育施設が備わっており、さらに、一緒に学ぶ友、学舎を共にした同窓の士によるネットワークが存在します。このような恵まれた教育環境のもとで在学生の皆さんが存分に学ばれ、社会に向けて飛翔されますよう祈念して、祝辞とさせていただきます。



創立90周年に寄せて ～思い出あれこれ～

第19代校長 下 中 雅 仁

私は平成22年度および23年度の2年間、校長として農大に奉職させていただきました。実はそれ以前にも、昭和54年度（1978年度）からの4年間は野菜科の職員として、また、平成17年度（2005年度）からの2年間は教育研修部長として農大に勤務しましたので、通算しますと8年間に農大に奉職させていただきました。紙面の都合もありますから、校長時代の思い出に絞って、徒然に思い出すことなどを綴ってみようと思います。

校長時代の思い出の筆頭は、平成23年3月11日に未曾有の東日本大震災が発生したことです。このことに関連し鳥取農大としての対応に心を砕いた記憶があります。平成23年度の入学式に際しては、来賓の皆様にお断りして、入学式参列者全員で、震災犠牲者に対しての黙祷から始めました。予期しなかったことでしたが、入学生代表による宣誓文にも、若者としてどのように支援すべきか…等々が述べられていて、演壇で目頭が熱くなりました。

全校集会等で鳥取農大生として何ができるのかと、学生諸君に問いかけたところ、東北の農大生に寄せ書きを贈ることに決し、学生および職員全員で寄せ書きをして福島農大と宮城農大に贈ったことでした。

折しも、私は全国農業大学校校長会の副会長を拝命していましたので、中央に出かけた折りに、全国の各農大の学生会が主体で、被災した福島農大に寄せ書きを贈る運動を展開しました（その経緯は毎日新聞社主催の「農業記録賞」に論文として応募）。

もう一つ思い出を書かせていただくとすると、それはT君のことです。彼は真面目で優秀な学生でしたので、2年次年の学科の単位取得は順調でしたし、2年次の年末には卒業論文の下書きをすでに完成させていました。

年が明けてT君の成人式が近付いた頃、彼の名前とよく似た青年が自動車事故に遭遇したらしい、との情報が私の携帯に入りました。果たせるかな、事故に遭遇したのはやはりT君でした。T君は彼の友人が運転する軽乗用車に同乗していましたが、道路が凍結していて車がスリップ横転した際に、車外に投げ出されたとのことでした。その晩、私は早速に救急病院を訪問したところ、彼には頭蓋骨骨折をはじめいくつかの骨折があること、そして脳内出血していたので緊急手術が行われたとのことでした。担当医師からは、残酷にも、命の保障はできないと告げられました。集中治療室に入ってみると、従来の彼の優しい顔とかわられない、包帯が巻かれたれムーンフェイスとなっていました。

彼の生きんとする生命力と保護者をはじめとして同級生の皆さんの祈りが通じたのか、彼は奇跡的に蘇りました。

農大の卒業式の日、彼は保護者に付き添われて、車いすで出席してくれました。私は壇上で個々の学生に卒業証書を授与しましたが、T君の名前が呼び上げられた際には壇上から降りて、T君に卒業証書を授与しました。「よく頑張ったね…」と声をかけましたところ、彼は笑顔で答えてくれたので、私は涙が出そうになりました。

農大に勤務していると、いろいろなドラマがあります。その都度、学生に寄り添うことを旨として過ごしたつもりです（「受持分担・一心同体」加藤完治先生の言葉）。しかし、「これで良かったのか…」と自問しますと、色々なことが思い出され自責の念が沸き上がる此の頃です。



経営伝習農場の思い出

経営伝習農場第9期生 小 司 勝 美

創立90周年おめでとうございます。

私は農家の長男として生まれ、子供の頃より家族や周りの人たちに長男は家の農業を継ぐことと言われ育ってきました。中学校卒業前に農業を勉強するなら関金の経営伝習農場が一番良いと先生達に言われました。一年先輩も入学しておられたので同級生3名で昭和33年に共に入学させていただきました。

入学してみたら、鳥取県全体、日野郡八頭郡、岡山県からも来ていた学生は男子だけで、全員が寮生活です。

中学校卒業と同時に入学者は本科生で1年間の就学でした。1年先輩と高校卒業者は研修生で殆どが本科生でした。学校は本館と教室はきれいな建物でしたが、寮と食堂は少し古い建物で、部屋は畳で、一部屋3人で生活しました。先輩も同じ建物で、規律は厳しく、少し恐かったけど寮の生活が若くて優しくて良かった。

本科生は午前と雨降り日は教室で一般勉強で、午後は実習でした。実習は水稻、畜産、果樹、野菜があり、私は野菜を専攻で習おうと思いました。畑に行ってみてビックリ、広い畑が茶の木で整然と区切られてきれいでした。一番初めの実習は里芋植え。広いところにたくさん植えました。鋤を使うことは苦にならなかった。

皆で寮生活なので、給食当番であった私は子供の頃より「男が台所に入ってはダメ」と言われていたので、給食当番は苦手だった。調理のおばさんの手伝いで大きな鍋で汁物とご飯を作る釜に付くおこげをにぎり飯にしてもらい、夜食に皆で食べ、美味しかった。ある当番日にすごい夕立が降り、調理場の近くに大きな音共に雷が落ち、その音にビックリしておばさんが包丁を足に落とし、怪我をされた。その時私は何もできなかった。ごめんなさい。

学校で一番大変だったのは集団赤痢の発生で、友達、先生が次々と入院していく。もう勉強どころではなかった。残った学生で農場のそうじ、消毒、家畜の世話をしました。私は牛が苦手だったけれど、乳牛の世話に行ったら牛が私をギロリと睨み、バカにした様子で頭を向け、そして蹴った。暴れ牛と思い、恐かった。

赤痢の最後の検査で、私も保菌者と分かり、病院に隔離された。少しは体が楽かと思っただが、どこも痛くないのに一人で一週間も病室でじっとしているのは苦しかった。退院して皆と大きな風呂に入り、楽しかった。翌日より晴耕雨読の学校生活に戻り、良かった。

冬の寮は部屋にストーブがなく、火鉢があるだけ。その上に洗面器でうどんを作って食べた。腹に入れば何でも良かった。一年間は直ぐに過ぎた。私が今も元気で野菜作りができるのは、農場で一年間汗して働くことを学んだからです。

今頃の農業は技術の進歩が早く、私いつまでも一年生で頑張っけて働いています。農場の野菜の中尾先生お元気とのこと。今も忘れません。今の農場に60年前の面影はなくとも、学んだことは忘れません。今の大学は立派できれいです。



農業に夢を描いた学校へ!!

農業経営大学校第1回生 山田恵子

農業大学校創立90周年、おめでとうございます。

私は経大一期生で養鶏専攻で入校しました。振り返れば、父母のもとを離れ、初めての寮生活に不安を持っての入学でした。しかし、一年間、同期の友と学業や寝食を一緒にした思い出は、私の人生で非常に良い体験だったと思います。同期の友は、仲間であり、同士であり、家族みたいなもので、今でも一番心に残る大切な人です。そして、経大で学んだことで県内外の多くの人と出逢い、友達を作ることができました。派遣実習では、東伯食鶏、地元の養鶏家の元で勉強させていただき、とても参考になりました。

卒業してこちらに帰ると学校で学んだ経験を活かして3,000羽の養鶏家として出発し、平成元年まで続けました。その後、時代の流れに合った経営に転換し、現在は梨150a、柿140aの専業農家として家族一丸となって頑張っています。

今、農業は大変な時代であり、後継者不足です。幸いにして我が家は、2人の子供が農業経営に携わってくれています。私は主人と「子供達に夢のある農業をして欲しい」と話し合っています。それは、生産・販売・加工・観光を組み合わせた総合的農業のことです。私たちが今までに取り組んできた独自商品「ぼて柿」の開発販売や農村の豊かさを活かした農家民泊などの経験をもとに、専業農家として自立できるよう子供たちにアドバイスをしています。そして、役割分担を明確にした家族経営協定を締結し、家族皆で経営についての話し合いの場を持っています。長男は販売、次男は農業生産部門を責任とやりがいをもって担当しており、夢のある総合的農業の実現を進めています。

私も70歳を過ぎましたが、老いを感じながらも仕事、人との出会いを楽しみながらこれからも頑張ろうと思っています。

ある時、新聞の片隅に「人生後半が面白い。味がでるのはこれから、これから」と書いてありました。この精神で頑張っていこう！と思います。

12月1日の記念式典では、同期の友とふれあい、思い出語りたいたと楽しみにしています。最後になりましたけれど、今後とも将来のある子供のためにも農業大学校の発展を願います。



農業大学校に学んで

農業大学校第1回生 寺道一郎

私が入学したのは、昭和58年4月鳥取県立農業経営大学校の最後の入学生としてでした。翌年の4月からは、現在の鳥取県立農業大学校と改名され、農大第1回卒業生となったわけです。

入学した当初は鳥取弁が分からず、2か月ほどは言葉が理解できず苦勞したことを憶えております。2年間の学生生活は、楽しい思い出もたくさんありますが、実習での辛い思い出で真っ先に思い出され、小鴨川での葦刈り、りんご園での網張り、昭和59年の大雪の年、2メートルほど積もった雪に梨園の梨棚の崩壊やりんご園の枝折れ防止のために毎日雪かきをしたことが大変だったと懐かしく思い出されます。

楽しい思い出は、その当時果樹科では一泊で夏の浦富海岸でキャンプ、冬は大山でスキーをしたこと、九州では経験することのない思い出がたくさんできました。

卒業後、地元へ帰り就農し、梨を栽培する中で、農大で勉強したことが幾つも役に立っています。春の摘蕾や人工交配、摘果、袋かけ、収穫、土づくり、剪定誘引。

学生時代は自分なりに一生懸命やっていたはずですが、今思えばまだ甘かったなど。でも、その時の学習が今の梨づくりの基本になっています。

梨栽培も年々新しい技術が開発され、新品種が続々登場する中で、経営としての梨づくりがぶれないよう、基本に忠実に努力を惜しまず、今後も日々研鑽していきたいと思えます。

在学中の皆さん、楽しい思い出とともに苦勞しながら体験した実習は、将来必ず役に立ちます。充実した学生生活をお送りください。

卒業後、果樹科では毎年OB会が開かれており、会長さんをはじめ、幹事の皆さんにはお世話になっております。九州出身の会員も増え、数年に1度しか参加できませんが、当時の先生方や新たに入会された卒業生の方などとお話しする場を得ることを楽しみにして、良い勉強の機会となっております。

鳥取県といえば二十世紀梨です。

梨のパイオニアとして、農業大学校とともにこれからも100年、200年と長きにわたり日本梨の先端を進んでもらいたいと思えます。



農業大学校での思い出と感謝

農業大学校第23回生 河岡 誠

昔から物作りが好きで、将来は自動車関係の仕事に就きたいと思っており、4年制大学の工学部を受験しましたが不合格となり、自動車関係の仕事はあきらめました。高校時代に実家のネギ作りの手伝いをしていたのですが、それにも興味があったので、今度は農業をやりたいと思うようになりました。そこで担任の先生に就農の相談をしたところ、農業大学校を薦められました。相談に行ったその日に農大について調べると、その日が出願締め切りの日であり、直ぐに受験の申し込みをしました。この日は、僕が初めて農大を知った時であり、人生最大のターニングポイントになりました。

無事に入学が出来て、農大生活が始まりました。小中高校では家からの通学であり、農大での寮生活は刺激が色々ありました。まじめな話からまじめではない話まで色々経験をしました。

農家留学研修は神戸のトマト生産者の所で40日間住み込みをしながら行きました。研修先の家族の方は厳しく指導してくれました。家族みんながものすごく体力があるし、作業のスピードも速くて、ついていく事がなかなかできませんでした。

農作業の時と休みの時のメリハリをしっかりと作る事。仕事はきっちりするけど、休みではたっぷりと遊ぶことも教わりました。家族みんながすごく明るくて、何をしても、とても楽しそうでした。この時に農大を選んで良かったと思いました。自分も農業をするなら、楽しくやりたいと思いました。この時のトマト生産者とは今でも交流があり、トマトを送ってもらったり、ネギを送ったりしています。神戸の近くに旅行に行く時は、直接家の行ったりもします。仕事からプライベートまで色々な事を教わる事が出来ました。

農大の授業では農業経営から、栽培管理、危険物の扱い方、機械操作・整備、各資格の取得など、全てを教わる事ができました。就農をしてから気が付いたのですが、農大に在学していた事で一番良かったことは、普及員さんや試験場の研究員さんと出会えた事でした。学生時代に知り合った農大の先生が普及所や試験場勤務になり、就農後に栽培などでわからないことがあったら気兼ねなく質問ができます。農大の時に、わからない事は直ぐに質問することが習慣化され、それが今現在も続いています。そのおかげでここまで農業をやってくることができました。

農大では青年農業者との交流もあって同世代の生産者と知り合いになれました。青年の方たちの中にも農大の卒業生が多く、農大の頃の話や、就農後の大切な話を色々教えてくれました。今も青年農業者の集まりに参加させてもらって、色々な事を勉強させてもらっています。

農大は勉強をする事、遊ぶ事、汗をかいて作業をする事の楽しみ、苦しい事、今を楽しむ事など、就農や人生そのものに必要な事の全てを教わる事ができました。こんなに楽しい農業を勉強することが出来る農大がいつまでも続いてほしいです。地域に新規就農者が農大から生まれる度に僕自身も刺激をもらっています。その刺激が僕の農業をいつも楽しませてくれ、さらに発展させてくれます。農大を軸に地域の農業が発展していく事を願っています。いつもありがとうございます。



学校の思い出

農業大学校第34回生 徐 漫 容

走り梅雨に濡れ、木々の緑もいっそう深まったように感じられ、農大のウメはもう出来ているでしょう。たまにホームセンターに作業着や長靴など専攻中に使う道具が目に入って、在学中の仲間たちの顔が頭に浮かび、一緒に作業をしていた光景がどんどん思い出してくる。実は、今年3月に卒業したばかりだ。長くはないけれど懐かしく感じる。

2016年4月11日、リュックと大きいスーツケース2つと手荷物を持って、JR京都の7番線にスーパーはくとを待つ間、心で「これでお別れしましょう！」という声をかけて名残惜しながら京都を出発した。それからの2年間、私は農大で果樹コースに在籍し、リンゴやモモやナシやブドウ等の果物が育ち、果実がどんどん出荷されていく光景を見てきた。その間、日照りでも、雨でも作業を続けましたが、最後に甘くてうまい果実を食べた瞬間に、これまでの疲れは忘れてしまうほどだった。私は、労働を生活の最も重要なものに見なします。毎日大地の温度を自分の手で身体で感じて、農業の辛さ、大変さも分かりました。

台湾出身の私は、農大で非常に多くの初経験をもらった。辛いことがあったけれど、楽しい事はいっぱいだった。例えば、初めての寮生活。チャイムは休日にもお部屋まで届き、軍隊みたいに朝と夜点呼をするのはかなり精神力が必要で、少し苦しかった。先生と他の学生たちは共に日本人しかいないことやスキー教室やソフトボールなどのスポーツも全部ゼロ経験からなので、わくわくしながら挑戦した。しかしそんな中で、特に、プロジェクト発表と卒論作成は最も成長することができたと思う。最初何のテーマでプロジェクトにするのかなかなか思いつかなかった時、途中で問題が起こってどうすればいいか分からなかった時、日本語での発表と論文作成など大変だった。いずれもすべて自らの力で解決できないけれど、幸いに果樹コースの先生はすごくサポートしてくださった。指導教員の森本先生はもちろん、黒木先生と追谷先生にも心より感謝申し上げます。プロジェクト研究が完成したところで、言葉の問題、技術や知識などの能力が不足していることを痛感した。もっともっと努力し、最後まで諦めずに絶対遣りとげると決意し、プロジェクト発表会できちんと発表することができ、本当に良かったと思った。それらの経験はきっと社会人になっても役に立つだろう。

農業大学校90周年おめでとうございます。異国から参った私は農大で新たな体験をいただいた。一方、農大も同様に時代の進歩に伴って今後も様々な新しい挑戦が待っているでしょう。此処に繋がる方々と一緒にサポートし、次の10年に一步一步踏み出していきたいと思います。

最後に、私にとって、最も貴重なのは皆との出会いだと思う。卒業後皆はそれぞれの進路に進んでいき、私はその一緒に過ごした記憶を一生の宝物として心に置き、また逢う日を期待する。

写真で見る校舎・設備等の変遷

開校直後の大学校



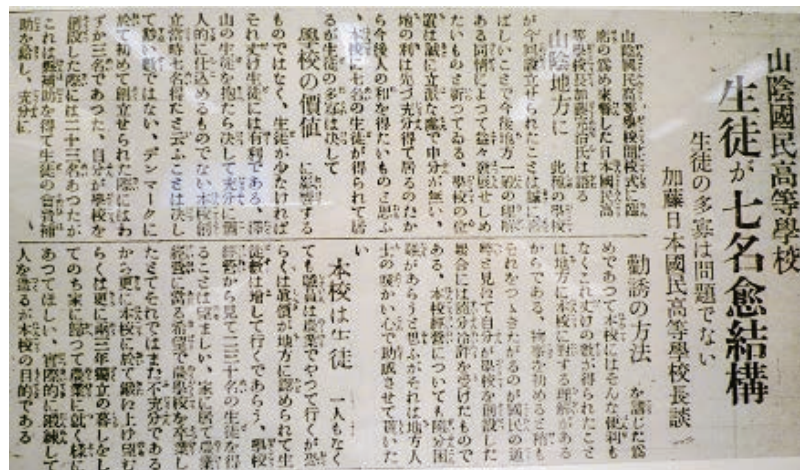
旧陸軍演習地の建物を利用した山陰国民高等学校全景（昭和6年撮影）



山陰国民高等学校開校式（昭和4年2月22日）



山陰国民高等学校初の修了生（昭和4年8月）



鳥取新報（昭和4年2月25日記事）

山陰国民高等学校
生徒が七名愈結構
生徒の多寡は問題ではない

～加藤国民高等学校長談～

「(略) 本校に七名の生徒が得られているが生徒の多寡は決して学校の価値に影響するものではなく、生徒が少なければそれだけ生徒には有利である。
(略) 家において農業経営にあたる希望で農学校を卒業したとてそれではまだ不十分であるから、更に本校において鍛え上げ望むらくは更に両三年独立の暮らしをしてのち家に帰って農業に就くようにあってほしい。
実際に鍛錬して人を造るが本校の目的である。」



学習風景（修農1期生）



開墾風景（修農1期生）



イモ販売風景（修農1期生）



大根施肥風景（修農1期生）



炊事風景（修農1期生）



食事風景（修農1期生）



散髪風景（修農2期生）



太鼓の合図（修農2期生）



夕べの礼拝風景（修農2期生）



小鴨川での禊ぎ風景（修農2期生）

平成9年全面大改修以前の大学校



経営伝習農場、農業経営大学校時代の本館(昭和40年3月建設)



農業経営大学校時代からの男子寮(昭和41年9月建設)



営農研修館
(43年3月建設)



昭和56年3月に建設された女子寮と食堂



体育館(43年3月建設)



農業大学校時代の本館(61年2月建設)



昭和57年2月に建設された男子寮

往時をしのばせる樹木



牛舎と円形広場の間に移植されたニセアカシア並木



移植前のニセアカシア並木



桜の巨木、旧本館前の元の位置
現在は教育棟と寮の中庭



大イチョウ 元の位置
現在は教育棟裏玄関脇



巨木となって駐車場に影をおとすメタセコイア



円形広場に移植されたヒヨクヒバ（イトヒバ）

平成9年全面大改修後の大学校



農業大学校東側全景



時計台と管理棟



教室棟（大教室と第3・第4教室）



体育館北側



体育館内部



最新の視聴覚器材の整った大教室



情報処理室



農産加工室



ペンション風の寮



寮の個室（1人部屋）



カフェテラス風の明るい食堂

現在の大学校



農業大学校東側全景



圃場全景（野菜・花き・畜産コースおよび研修科圃場）



農業学習館（研修科施設）



タスコドーム（全天候型実習圃場）



鳥取型低コストハウス（モデルハウス）

写真で見る最近の10年間

【農大第25回生（H21.3）】



果樹科	植原 証	大上直也					
野菜科	秋末達矢	小谷健太郎	杉本直美	田村智和	中島圭祐	花木 賢	松井春慶
	山本智史						
花き科	安藤由美	片山隆智	北尾明絵	小林正法	中原朱梨		
畜産科	石賀潤一	石橋弘充	宇山愛美	遠藤寛明	是永有己	辻 拓也	秦 智美
	三崎幸成	宮本 良	山下章子	山本晴臣			

【農大第26回生（H22.3）】



果樹科	今村憲治	中谷好孝	吉田清志				
野菜科	奥田慎也	吉川 徹	江田雄兵	鈴木光平	武中健一	谷垣翔平	西本孝弘
	藤本 駿	山形篤司					
花き科	植岡壮平	高藪栄莉蘭	藤原 綾				
作物科	池信宣篤	生和浩康					
畜産科	青木智子	石賀千章	西村亮馬	山本瑞喜			

【農大第27回生（H23.3）】



果樹科	奥谷 光	野口雄気	前田磨己人	森脇成己			
野菜科	生田 稔	柴田賢司	鈴木智貴	高山陽太郎	伊達直輝	徳山達也	橋本孝俊
	山口寿弘						
花き科	青戸未明	足立 花	松上千輝				
作物科	谷本幸一	新見悠太	村岡亮一	村上雄平			
畜産科	錦織まゆ子	山上すみ玲					

【農大第28回生（H24.3）】



果樹科	磯江崇志	梶村常征	河原和也	武田倫明	森尾太久朗	矢吹和也	
野菜科	加藤 僚	河本皓平	倉掛美羽	近藤昌平	坂口翔也	西村勇人	野口和輝
	松井隆史	吉井悠起					
花き科	青戸 建	影山剛志	谷口翔吾	鳥橋あゆみ	野崎純一		
作物科	久保田剣太	新谷弥由	田口 諒	田中千夏	山口聖一郎		
畜産科	板持翔磨	大栄享功					

【農大第29回生（H25.3）】



果樹科	山田翔太	山根裕史					
野菜科	青木 貴	岡田有生	加藤 翔	川上柊維	橘高 叶	久野紘史	西垣実香恵
	増本和也	山本征太	吉田浩祐				
花き科	伊丹 森	音田智希					
作物科	東 剛史	前川弘樹	松尾一輝	光田大希	森岡成貴		
畜産科	安達瑞華	岩本弥気	衣笠 実	鈴木伊織			

【農大第30回生（H26.3）】



果樹科	庄司陽亮	高田智生	藤井裕國	松本侑磨	丸山翔吾		
野菜科	岡野 孝	川本大和	國本伊代	高 操香	谷岡麻梨菜	安田奈緒美	山崎真史
	山根美沙	渡邊直人					
花き科	板倉京子	上山由起子	加藤利江				
作物科	谷田 翼	長谷川潮	古川剛成				
畜産科	稲葉大志	門脇圭吾					

【農大第31回生（H27.3）】



果樹科	小笠原良絵	河村友香	中垣全広	中嶋幸介	中谷勇也	野口智広	文村権彦
野菜科	伊田杏奈	河口駿介	篠原晴季	嶋田雅峻	谷川祐次	船越 暢	
花き科	杉本健悟						
作物科	大西陸雄	田中素之	富田夏江	仲山佑磨			
畜産科	大内秀彦	古田仁美					

【農大第32回生（H28.3）】



果樹科	井上椋太	大谷結紀	幸野将大	角 雄介	藤井 駿	山口智大
野菜科	東 進寛	粕谷耕平	坂根勇一	竹内皓大	堀場翔太	水本奈央
花き科	木村 睦	室 慧佑				
作物科	入江夏菜	清水昭典	武田航平			
畜産科	小林憧威					

【農大第33回生（H29.3）】



果樹科	井上桃香	奥根 涼	上林 耕	小西正紀	山根拓人		
野菜科	荒松卓哉	安藤文裕	石崎朋江	小西大地	中江 滯	中村孝史	平田輝将
花き科	川口淳希						
作物科	谷川雅夢	土居皓平	早川貴弘	樋野悠太			
畜産科	内部加奈	高濱征彦	森山華奈子				

【農大第34回生（H30.3）】



果樹科	池本麻祐	笹原洸希	徐 漫蓉				
野菜科	門脇幸律	西田将貴	平田一州	松本晋昌	三竹ひかり	森石凌太	吉持壮馬
花き科	竹田 蓮						
作物科	岡本兼徳	宮代竜弥					
畜産科	近藤あゆみ	津村恒士郎	西田修平	服部綾乃	山崎拓実	蘆川嘉人	

10年間の風景

H20 沖縄研修



メンソーレ沖縄

H20 市場研修



な～るほど

H21 田植



腰が痛いよ～

H21 島根農大交歓会



打球の行方は？

H22 海水浴



切ったど～！

H22 海水浴



どっぽーん

H22 スキー 1



歩くスキー？

H22 修学旅行



緊張気味？

H23 かごかきレース



えっさほいさ

H23 カヌー



どやこのバランス

H23 マラソン



路上に注目！

H23 中部フェスタ



知事と一緒に「農大農産物いかがですか～」

H24 USJ



遊び尽くすぞ～

H24 かごかきレース



お猿の籠屋だほいさっさ

H24 校内駅伝



先生、本気出すなよ～

H24 大阪流通研修



天井に何が？

H25 NHK取材「とっとりVOICE」



緊張するからカメラあんまり寄らないで

H25 高徳院大仏



神妙な面持ち

H25 野菜科が農林水産部長表彰受賞



優れたプロジェクト指導でいただきました

H25 田植



田植ってチョー楽しい

H26 モンゴル中央県知事来校



Сайн байна уу? (こんにちは)

H26 校内駅伝大会



早く受け取ってくれ～

H26 花育活動



上手にできたよ～!

H26 関金文化祭



梨の小袋掛けに挑戦

H27 中四ブロックプロジェクト発表会 in 米子



今年も全国大会切符ゲット

H27 中部フェスタ



控えおろう この農大梅が目に入らぬか！

H27 アグリチャレンジ研修スタート



1期生全員集合～がんばるぞー！～

H27 修学旅行



芸能人いないかなあ

H27 農大市



稲作魂

H28 モンゴル研修生とボーズ作り



ハンバーグ？餃子？シュウマイ？

H28 修学旅行



H28 修農祭



恒例の餅つき風景

H28 大豪雪



おーいネギはどこだ～？

H28 スキー教室



吹雪かすんでみんな美男美女

H29 モンゴル交流20周年



小林校長に名誉勲章が授与されました

H29 山陰放送テレビ取材



全員でまるっと！

H29 大阪市場流通研修



市場の役割とは…

H29 全国和牛共進会（宮城）



第4区（系統雌牛群）優等賞・特別賞を受賞

H30 島根農林大学校との交歓会



お互いの闘志を讃え合って

H30 新入生歓迎B B Q



イエ～イ



雇用就農相談会（進路決定に大変役立っています）

沿 革

1 開校と変遷

1 山陰国民高等学校（省略表記「国校」）

昭和初期、世界的な経済恐慌は日本農村にも及んで農村は疲弊の極に達した。その経済再生は農政の急務となり、諸施策が打ち出されたが、つまるところは人の養成にあるとの観点から、農村の中堅人物の養成を目的とする研修教育機関が全国に設置されることとなった。

そもそも大正9年、群馬県の篤農家清水及衛氏が産業組合講習会に来県し、山形県自治講習所を紹介したのがきっかけで、有志の人が同所を視察し共感するところが大きかったが、まだ機は熟さなかった。

大正13年夏、農村教育講習会が開催された機会に、同所加藤完治所長の講話を聞き、国民高等学校設立の機運が盛り上がった。

大正15年11月、三徳信用購販売利用組合は県下産業組合に呼びかけて、国民高等学校建設を建議し、実行委員会を設けてこれに付託した。

昭和2年、実行委員会は郡内各団体幹部と期成同盟会を組織し、財団法人山陰国民高等学校設立の評議員を決定するとともに、町村長会1,500円、産業組合部会1,500円、自治協会100円、郡農会150円の拠出を決議した。

当初は赤碕町の農林省種馬所跡地を候補地としたが入手がむずかしく、陸軍演習地跡であった関金町の現所在地となった。

目的は、農村の中堅人物の養成にあり、どのような境遇のもとでも徐々に家や村の改善の実をあげられるような、堅実にして有為な人物の養成を目標とした。修業年限は1年で、寄宿舎に収容し、なるべく先生と生徒が起臥寝食・農作業を共にし実践教育を行うこととなった。

山陰国民高等学校は山形県自治講習所（大正4年開設）、日本国民高等学校（大正15年認可、昭和2年開校）に次ぎ全国で3番目の国民高等学校として、昭和4年2月に開校した。

・卒業生 47名

2 県立修練農場（省略表記「修農」）

昭和9年、国は中堅農業者の養成を目的として各府県に県立修練農場を設置することとし、初年度は25県に設置された。山陰国民高等学校は全施設を無償で鳥取県に寄付し、県立修練農場として新発足した。修業年限は1年で、高等小学校卒業以上の学力を有する18歳以上の男子で、将来郷土農村にとどまり、農村の建設に挺身すること等の入場条件があった。

なお、満蒙開拓移民訓練、戦時下にあっては、食糧増産隊の活動の場ともなった。

・卒業生 延べ385名

（うち研究科28名。そのうち5名は研究科だけの課程）

3 県立経営伝習農場（省略表記「経伝」）

昭和23年、農業改良助長法の成立により普及事業が発足し、昭和24年農林次官通達でもって修練農場は経営伝習農場と名称が変更されることとなった。本省主管局も開拓局から農業改良局に、本県でも開拓課から農務課へ移管された。

経営伝習農場の発足に当っては、当時、連合軍司令部はかなり批判的だったといわれるが、普及事業の一環としての農村側の受け皿づくりの場として理解が得られたようである。農場の運営に当っては、修練農場の鍛錬主義的なものから経営合理主義的なものへの方針変更がなされた。

修業年限は1年で、中学校卒業者を対象とする本科と、本科卒業者または高等学校卒業者を対象とする研究科が設けられた。

昭和36年には農業基本法が制定されたが、この年の本科入学者数は6名で、にわかに存廃が問題とされることになった。その後、同窓会の陳情、特に中部町村会長を歴任された三朝町坂出雅己町長の熱意、石破二郎知事の深い理解により、整備拡充する方向が打ち出された。

昭和37年以後、農村青年研修館、農業機械技術者養成施設、農業専修学園施設など国の補助も得られるようになり、施設の整備が進んだ。

・卒業生 延べ534名

(うち研究科他113名。そのうち22名は研究科だけの課程)

4 県立農業経営大学校 (省略表記「経大」)

農業の規模拡大、専門化、機械化の進展の一方で、高学歴化が進み、高等学校卒業者を対象とした農業者の養成が要求されるようになった。このため、農村において指導的役割を果し得る農業者の養成を目的に、昭和42年に2年制の農業経営大学校を発足した。農業経営大学校では、女子学生の受け入れを開始し、また専門別の班を設けた。

発足当時は1年次在籍、2年次在籍の教育形態であったが、昭和47年度からは2年次の在籍をやめ半年間の農家留学、49年度からは3ヶ月間の農家留学を行った。

なお、農業経営大学校のはじめ2年間は中学校卒業者を対象とした実科を併置した。

・卒業生 436名

(うち実科39名。そのうち17名は経営伝習農場本科卒業生)

5 県立農業大学校 (省略表記「農大」)

国際化の中で、大幅な貿易黒字を背景に日本は経済大国といわれるようになり、貿易自由化の進展、米の生産制限、農畜産物価格の伸び悩みや低下などから農業後継者は激減し、農村における兼業化が進んで、地域農業の担い手の確保が深刻な課題となるようになった。

このため、本校卒業後直ちに就農することを期待するだけでは、現在ならびに将来にわたって地域の農業を支える有為な人材の確保が困難となってきたことから、農業者となる人はもとより、農業関連の仕事に就きながら、農業の指導的役割を果たすことのできる人材の養成もあわせて行うことを目的に、昭和59年、現在の農業大学校が発足した。

1年次の前半は、共通科目としてのオールラウンド学習を取り入れ、約40日間の農家留学研修の後、1年次の後半から2年次にかけて専攻学習を進めることとなった。

また、人事院規則による短期大学卒業者と同等の処遇を受けることができるようになった。

～60周年記念以降～

校舎・学生寮等の老朽化が進み時代に対応した十分な教育が行えない事などから、平成元年頃から農業大学校の整備の機運が高まり、平成3年に至り農業大学校運営協議会が設置され校舎の改築等を中心とした整備計画がまとめられた。

平成4年度に至り「21東ほうきふるさと構想」の1つの柱として農業大学校の全面的な見直し、改革整備の方針が示された。

整備はふれあい農業学園として、学生教育の農業大学校部分の他に農業における生涯学習・国際交流の機能を有する国際農業交流館を内容とするものであった。

このため、ふれあい農業学園整備委員会で検討を重ね平成6年には構想の最終案、基本設計が出来上がった。

た。また、管理運営体制及び教育内容についても方針決定がなされた。

☆ 整備の理念

青年農業者の養成を基本とし、幅広い人材育成や環日本海交流の拠点として利用出来る「開かれた農業大学校」を目指す。

☆ 建築の基本方針

地域の風景にマッチしたデザインとし既存樹木はなるべく残すとともに、出来る限り木材・瓦を使用する。なお、全寮制の学校であるので寮から廊下伝いに教育棟に行ける構造配置とした。

☆ 工事の概要

- (1) 工期：平成7年11月～平成9年9月 落成式：平成9年10月28日挙行
- (2) 総事業費：約49億円

☆ 改革の内容

平成9年3月28日「鳥取県立農業大学校管理規則の一部を改正する規則」が公布された。(鳥取県規則第26号) その内容は、

- (1) 養成課程：人気の高い花き科を設置し、教育内容も鳥取らしさ、語学等を充実
- (2) 研究課程の設置：養成課程卒業以上の者を対象に2年間で高度な教育を行う
- (3) 専門技術課程の設置：1年間で即就農に必要な専門的先進的実践技術を習得する
- (4) 研修課程の充実：一般県民から高度な農家対象の研修まで幅広く内容充実
- (5) 国際交流部門の充実：農業分野を始め、農業以外の日本文化講座等も開催する

平成10年5月より、本県の友好交流先であるモンゴル中央県から農業指導者などの公務員を受け入れ、野菜の生産技術等の更なる向上と効率的な指導方法等を習得することを目的に農業大学校での研修を開始した。開始当初は約半年間の研修(うち約1ヶ月は日本語研修)だったが、平成20年からは約2ヶ月間の短期研修となっている。

～70周年記念以降～

平成12年に林業技術者養成のため専門技術課程森林科が新設された。以後、林業技術者の育成を続け、平成19年を最後に廃止された。

平成14年から兵庫県加古川市にあるスーパーマーケット(イトーヨーカ堂)で、本校産農産物を養成課程の学生が販売する体験実習が始まった。

平成15年3月に寮室30室3階建ての女子寮が完成し、女子が移動した。同時にそれまで入寮できなかった研究課程、専門技術課程の学生も入寮できるようになった。

就農を目指す研修生や、農業体験の希望者が増加したため、平成17年5月に農業学習館を建設し、研修生の体験学習の場として活用している。

平成18年度には、平成13年度から開始されている農業専門家派遣事業(モンゴル中央県に農業専門家を派遣し、中央県の一般農家等に対して農業指導講習会を実施するほか、これまで鳥取県が受け入れてきた農業研修生のフォローアップを行い、中央県の農業レベルの底上げと鳥取県の知名度向上を図る事業)に農業大学校から二人の助教授(山口祐助氏、山寄勝一郎氏)が派遣され現地指導を行った。

平成20年2月に本校養成課程卒業生に専門士(農業専門課程)の称号を付与することを認可する文部科学省の官報が告示された。これに付随して3月に鳥取県立農業大学校管理規則が一部改正され、正式に専修学校として位置づけられ、養成課程卒業証書の文面に専門士(農業専門課程)の称号が表記された。

平成20年4月に、主に次の事項を改正した。

- ①養成課程の果樹科、野菜科、花き科、畜産科が養成課程農業経営学科となり、果樹コース、野菜コース、花きコース、作物コース、畜産コースの5つの専攻コースとなった。

- ②研究課程、専門技術課程は廃止された。
- ③研究課程のうち就農研修部分は短期研修科となり3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月の3コースとなった。
- ④養成課程の全寮制が廃止され、希望者に対する許可入寮制となった。
- ⑤平成20年度入学生から社会人特別入学枠が設けられた。

平成20年6月に、学生が丹精込めて作った農産物を農大内で自らの手で販売する初の「農大市」を開始し、学生自らが商品のパッケージやポップ広告の作成・販売等を行っている。

～80周年記念以降～

平成22年度には従来の職名「助教授」が「准教授」に改名された。又、養成課程に30名の定員を上回る33名の新入生が入学した。

平成23年度には見直しを検討してきた新カリキュラム（実習時間の増、6次産業化や社会貢献活動のカリキュラムへの導入等）を養成課程1学年に摘要実施した。又、学校の外部評価を開始した。

平成25年12月には、管理棟や学生寮の給湯用の木質チップボイラー施設が完成し、点火式に招待した関金小学校の児童と学生会役員が種火をたいまつリレーしボイラーに点火した。この他、野菜・花きハウス暖房用に木質ペレットボイラーや地中熱ヒートポンプも完成した。

平成26年3月には野菜コースの職員が農林水産部長表彰を受賞した。これは平成20年度から6年連続で本校の学生が中四国ブロックの代表として全国プロジェクト大会で発表。特に野菜コースの学生を平成22年度から4年連続の出場に導き、うち3名を上位入賞に導いた優れた指導成果が評価されたもの。

平成26年8月には、農業法人等への雇用就農が重要な進路の一つとなる中において初めて雇用就農情報交換会を開催し、農業法人等と学生・研修生の情報交換及び個別相談を行った。求人を検討する農業法人等15社の参加があった。

平成27年には就農を目指す社会人向けの研修を改編して充実させることに伴い、研修科に訓練指導員2名（非常勤職員）、研修調整員（非常勤職員）2名が配置された。具体的には、短期研修科（3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月間の研修）を改め、講義と校内での実習によって農業の基礎的知識と栽培（飼育）の基本技術を学ぶ12ヶ月間の「スキルアップ研修」、1年間先進農家の元で実践的に学ぶ「先進農家実践研修」、3ヶ月間の「アグリチャレンジ研修（公共職業訓練）」の3種類の研修を開始することとした。

同年11月には全天候型演習施設（大型テント施設タスコドーム）1棟（227.9㎡）を新設し天候にかかわらず農作業や機械操作実習を行うことができる環境を整備し、産業人材センター倉吉校の委託を受け、公共職業訓練「アグリチャレンジ研修」を11月5日に開始した。この研修は農業従事希望者の基礎訓練として農業に関する基礎知識と農作業に必要な基本技能を習得できる3ヶ月間の訓練であり、第1期生として募集定員20名に対して18名が入校した。

平成28年2月1日には新たに創設した先進農家実践研修の第1期開校式を行った。この研修は、就農希望地において先進農家の元で実践的な技術と経営ノウハウを学ぶ研修で、市町村、農協、農業改良普及所等の様々な機関からなるチームが農業経営開始をサポートすることが特徴である。第1期生は2名でそれぞれ北栄町長芋生産部、湯梨浜町ブドウ生産部の先進農家のもとで1年間の実践的な研修を開始した。

平成28年4月1日、前年度から始まった公共職業訓練アグリチャレンジ科（アグリチャレンジ研修から名称変更）について、農作業の基礎技能を定着させるため、訓練期間を4か月に延長、1期定員を25名に増やす見直しを行うことに伴い、訓練指導員（非常勤職員）1名が増員配置された。

平成28年8月1日、鳥取県で初めて食の6次産業化プロデューサー育成講座（レベル1から3の認証講座）が本校を会場に開催されることとなり、12月までの15日間の研修が始まった。受講者は本校の学生・研修生で希望する者10名、一般参加者18名、農林水産分野の県内高校生6名と県職員12名の合計46名であった。

平成28年10月21日、午後2時7分鳥取県中部地域を襲った最大震度6弱の地震により本校も大きな揺れに

見舞われた。人的な被害はなく、当日は推薦入試の日であったが、試験も無事終えることができた。瓦の脱落や水道管、冷暖房配管の損傷、晩生梨「王秋」の落果などの被害があった。水の確保が十分できなかったことからアグリチャレンジ科と研修課程は1日、養成課程は3日間の休校とした。

平成28年12月16日、平成27年度決算審査特別委員会報告が議会に提出され、農業大学校について「農業大学校職員の学生指導のスキルアップならびに農業高校と農業大学校をつなぐ連続性のある教育実践ができるよう、農業大学校と農業高校の間に、可能な範囲での人事交流、情報共有など連携のあり方を検討すべき」との口頭指摘がなされた。

平成29年4月1日、鳥取県立鳥取湖陵高校の脇清貴教諭が教員現職教育内地留学制度を利用して農業大学校に派遣され（身分は教諭のままで農業大学校への併任発令）、1年間の研修を開始した。

平成29年4月11日、鳥取県とモンゴル中央県の友好交流20周年を迎え、モンゴル中央県からバゲジド・バトジャルガル知事率いる9名の代表団が来県され、満開の桜が咲く農業大学校で記念行事と農場視察が行われた。記念式典では、中央県からモンゴル中央県親善協会と農業大学校に名誉勲章が授与された。中央県知事、平井知事、河本親善協会会長らが、円形広場に桜（ソメイヨシノ）を記念植樹された。

平成29年4月に国家戦略プロフェッショナル検定の食の6次産業化プロデューサー育成プログラム実施機関の認証を取得し、「食の6次産業化プロデューサー育成講座（25科目）」を開講した。農業高校から51名、農大生3名、一般4名が受講した。

平成29年3月に時代に即した学校教育とするために管理規則改正を行った。食の安全、労働安全、環境保全を確保するグローバルGAPの実践を行う「生産工程管理」を新たな科目として追加した。4年制大学編入に対応したカリキュラムの統合、名称変更を行うとともに科目毎の時間数を変更した。

平成30年4月に県組織定数の改正により次長が教務研修参事を兼務することとなった。これらに伴い正職員が2名減となった。

平成30年4月からスキルアップ研修に、県内で栽培される主要野菜4品目（スイカ、白ネギ、ブロッコリー、ミニトマト）の栽培管理技術を習得する短期研修（各4カ月間で5期）を新たに開講した。

2 年表

【山陰国民高等学校時代】

昭和2. 1. 8	財団法人山陰国民高等学校の設立を目的として郡内団体幹部が集まり、設立期成同盟会を組織して準備に着手した。
3. 8. 7	倉吉町産業組合県連合会内に置かれた期成同盟会に、山形県自治講習所より岩本泰治氏が書記として着任し、開校の準備に当たることになった。
4. 2. 1	山形県自治講習所教師早川一男氏が初代校長として着任、校長以下職員4名の体制が整った。
4. 2. 11	紀元節（現建国記念の日）の佳節を期して第1期入校式を挙行し、生徒7名と父兄、期成同盟会役員が出席した。
4. 2. 22	快晴温暖な天候のもと、日本第3番目の国民高等学校として開校式を挙行。出席者は、加藤完治日本国民高等学校長、橋本傳左右衛門京都大学教授、田中・山柘両鳥取高農教授、県学務部長外70余名が出席した。
4. 4. 5	職員・生徒合作の文集「天地」第1号を刊行。
4. 8. 4	第1回短期講習開催。7日間で40名が受講。 ・日課＝朝：やまとばたらき、午前：学科、午後：開墾、夜：座談会 ・初年度夏作面積 水稲：8反、陸稲：1町2反、豆類：5畝、いも類：5畝、すいか：8畝、かき：2反
4. 12. 1	日本国民高等学校旅行隊来校し、本校より7名が合流して朝鮮・満州の各地を見学して翌年元旦に帰校した。
5. 2. 8	第1期生の修了式を行う。
5. 3. 21	第2期入校式が行われ、東京、兵庫、熊本の出身者を含め10名が入校した。
6. 3. 1	初のメス牛が誕生し、学校挙げて大喜びとなる。
6. 5. 12	農林省石黒忠篤農務局長（のち農林大臣）来校し、餅をついて土間で話を聞く。
6. 7. 3	早川校長退職し、岩本泰治氏が校長代理に就任する。
6. 10.	2日ばかりで全員が鳥取高農、農事試験場を見学。吉岡村の長柄稚蚕共同飼育所に1泊し、夜中3時半の起床ラッパに驚かされる。徒歩で鹿野、三徳、三朝を経て倉吉に着き、バスで関金に帰ったのが午後8時で、全員よく歩きよく疲れたという。

【県立修練農場時代】

昭和9. 4.	中堅農業者の養成を目的として、国は各府県に修練農場の設置を指導し、初年度に25県に設置された。本校は全施設を無償で鳥取県に寄付し、県立修練農場として新発足した。
---------	--

- 9. 9. 連日大雨のため小鴨川が氾濫し関金・倉吉一帯で大水害が起こり、耕地や家屋が流失した。
- 10. 4. 毎年の行事として、北海道を除く鳥取以東の修学旅行20日間を行う。各県の修練場に宿泊し、将来の農業について意見交換を行った。
- 11. 8. 東伯郡一円から参加できる盆恒例の地元地蔵講大相撲に農場チームを組んで出場し、好成績を収める。
- 12. 4. 第2代場長（校長）に関谷良三氏が就任する。
- 13. 7. 関谷場長（校長）退職し、第3代場長（校長）に山崎永雄氏が就任する。
- 13. 9. 短期講習生の宿舎として60坪の日輪兵舎、40坪の開拓農民訓練宿舎を建設し、以後、県下一円の農村青年及び農民の短期講習、満州開拓移民の訓練を継続的に行う。
- 14. 7. 満州建設勤労奉仕隊（鳥取、鳥根、和歌山、奈良の青年150名）の中隊長として、山崎場長（校長）は満州国浜江省ザルトムで2ヶ月間勤労奉仕に従事する。
- 15～16 食糧増産報国推進隊に生徒も参加し、県内各地で食糧増産に励む。
- 18～20 食糧増産隊（農兵隊）の基地となり、簡易宿舎1号、2号を建設し、ここを拠点として県内各地の開墾、食糧増産に活躍した。
- 21. 11. 山崎場長（校長）の退職にともない、第4代場長（校長）に渡部一真氏が就任する。
- 21. 12. 県内の開拓入植者の訓練も行うこととなり、名称を県立開拓増産修練農場と改め、入植課の所管となり修練農場関係職員と開拓増産関係職員とが併設された。
- 22. 4. 基幹開拓者養成所が併設され、場長が兼務した。
- 23. 7. 山陰国民高等学校創立20周年記念式典を行う。講演会に京都大学橋本教授、八ヶ岳中央修練農場久保先生、鳥取農専遠山先生などを招き、また、農産物品評会、畜牛品評会、農機具展示会、映写会、相撲大会などを開催した。

【県立経営伝習農場時代】

- 昭和24. 8. 名称を経営伝習農場と改め、普及事業の一環として扱われることになり、県では農務課の所管するところとなった。
- 25. 1. 矢送村（現関金町）黒谷の山林3町8反3畝、同関金宿池谷の山林4反3畝を購入し、薪炭雑用に供することになった。（後に昭和39年県林務課の所管となる）
- 25. 6. 渡部場長（校長）の退職にともない、第5代場長（校長）内田安悦氏が就任する。
- 26. 4. 畑の周囲の道路沿いに麦苗を植え付ける。
- 26. 6. 30万円の予算でオート三輪車を購入した。これにより、馬車にドラム缶を積んで倉吉まで一日がかりで往復したブタの残飯運びが能率化された。
- 27. 3. 畑3町5反、水田2町2反を正式に購入。畑に二十世紀梨を新植し、残り

- を飼料畑にあてた。
27. 4. 天神野土地改良区は正門横の水路に分水ロータリーを設置するとともに、水路を整備した。ロータリーからの分水口の大きさは関係水田面積に応じて設定された。
30. 3. 教室が建設された（この教室は経大時代には野菜教室に当てられ、昭和60年度に本館が建設されたため撤去された。）
31. 4. 本館及び大家畜舎を建設し、乳牛飼養の準備を整える（この本館は経大時代には果樹教室、一時は食物実習室にも当てられたが、当時の本館の建設により撤去された。大家畜舎は県道沿いにあったが、当時の牛舎の建設により撤去された。）
32. 4. 緬羊、山羊を処分して乳牛2頭を導入した。
34. 7. 日野郡江府町出身の生徒が仙隠溜池で水死する。
35. 4. 馬を処分して耕うん機を導入した。
37. 3. 国の助成を受けて、初めての鉄筋コンクリート2階建ての農村青年研修館が竣工し、短期研修生の宿泊研修施設が整うとともに、付設された衛生的な食堂が利用できるようになった。（この食堂は昭和56年度に女子寮を兼ねて改築された。）
38. 3. 企業の生産教育の施設として山陰初のルーズバーン牛舎を建設し、岩手県より乳牛8頭を導入した。
長期生寮舎位置にルーズバーン牛舎を建設したのにもない、町道に沿って鉄筋平屋建ての寮舎を建設した。この寮は、経大の発足とともに半分を女子寮に改装利用したが、昭和56年度に同位置に新男子寮が建設され、撤去された。
38. 8. 農業指導者養成所が併設され、農村青年研修館を拠点に在村中堅青年を対象に高度な経営技術の習得を目的とした研修が始まった。
38. 12. 県大型農業機械センターが設置され、機械整備舎・格納庫の建設とトラクター・アタッチメント・工具類の整備ができ、農業機械研修を開始した。
39. 4. 大型農業機械の実習用ならびに酪農飼料基盤確保にあてるため、関金町泰久寺の離農跡地4.9ヘクタールを買収して農地整備をおこない、牧草を作付けた。
40. 3. 農業専修学園整備事業により、鉄筋2階建て170坪の本館を建設した（この建物は当時の本館の建設により、教育棟改装整備された。）
41. 3. 文集「草の芽集」を発行（翌年第2集まで）
41. 4. 内田場長(校長)の退職により、第6代場長(校長)に桑田明氏が就任した。
41. 9. 昭和42年度より農業経営大学校の発足が決定的となったため、諸施設の整備に着手した。
・50人収容（1室4人）の鉄筋2階建男子寮の建設
・グラウンド東側に職員校舎を建設（鉄筋2階建：校長用1棟、職員用4戸建1棟）
・旧長期生寮の半分を女子寮に改造。
・肉豚舎1棟（60坪）を建設。

- ・成鶏舎5棟(2,500羽収容)、大・中雛舎6棟、育雛舎・管理舎2棟。
- ・なし44a、くり16a、かき17aを新植し、果樹園規模を拡大。
- ・水田3.8haの基盤整備を行ってほ場区画を拡大し、農道の拡幅、水路の整備によりトラクターによる一貫作業を可能にした。
- ・開拓地飼料料畑に簡易格納庫を設置。

この年、天神野土地改良区が仙隠溜池の堤防漏水防止施工を計画し、本校用地の一部堀削、資材運搬、資材置き場等の便を提供したことに対し利用料を支払うことを条件に、好意的に溜池漁業権を永久的に本校に与えることを約し、以後職員親睦会の管理下において種鯉を放流し、秋の堤干しは恒例行事となった(平成19年まで続く)。

【県立農業経営大学校時代】

- 昭和42. 4. 農業経営大学校として新発足し、2年制度となり、女子の受け入れも開始する。中学校卒業者は42・43年度の2カ年実科として併置した。桑田場長が校長に就任する。学校組織は総務・教務・経営の3課が設けられた。校章を制定。
42. 6. 自動車はライトバンとトラックが新しく配置された。
42. 6. 12 農業経営大学校開校記念式典が挙行され、石破二郎知事をはじめ91名の来賓が出席した。
知事は本館前にヒメラヤシイダを記念植樹する。
42. 12. 文集「あけぼの」を創刊(現在第31集まで発行)。
43. 2. 校歌を制定(作詞:山下清三氏、作曲:牧野晋氏)。
43. 3. グラウンド隣接水田14aを買収してグラウンドを拡張した。
43. 4. 中部農業経営圏整備事業で営農研修館が竣工し、初代館長に谷川建夫氏が就任した。講堂(体育館)が付設されたことにより、課外のクラブ活動が活発に行われるようになった。
43. 5. 関金町から本校正門までの県道が完全舗装となった。
62㎡の花きガラス温室設置(昭和61年撤去)。
44. 4. 桑田校長の退職により、第7代校長に池田稔夫氏が就任する。
44. 5. トラクターの転倒事故により、岸本貞治主任殉職される。
45. 4. 池田校長の退職により、第8代校長に井上正敏氏が就任する。
47. 4. 教育制度を改正し、2年次の在家期間を廃して5ヶ月の農家留学研修、専攻部門の毎月1回の郊外学習を制度化した。また、野菜部門を新設した。
47. 11. 国の助成を受け、トラクター2台をはじめ酪農・果樹関係の作業機を導入し、格納庫2棟を新設した。また、野菜の出荷調整室も新設した。
48. 12. 野菜施設に加温式鉄骨ハウス1棟(360㎡)を新設し、これにより加温、無加温のハウス施設と露地の基本体制が整った。
繁殖豚舎が老朽化したため、これを撤去して、群飼豚房とフロアヒーティング分娩房を整えた新豚舎を設置した。
男子寮、女子寮のそれぞれ1室を改造して和室の談話室を設け、テレビ・

- 碁・将棋等の娯楽用具を整えた。
- 養鶏部門の廃止決定。
49. 2. くり園を廃し、跡地に親水・豊水を新植して、42年植え付けの幸水とともに三水が揃った。
49. 4. 谷川営農研修館長の退職により、第2代館長に疇佑志郎氏が就任する。食堂の模様替えを行い、環境を整える。
50. 4. 入校生が急増した。
学生の自動車校内持込みを許可制のもとに承認する。
51. 11. かき（富有、伊豆、西村早生）を新植する。
52. 2. かきの老木（国校1期生が開園植栽）を廃し、跡地にぶどう（巨峰、デラウェア）を新植し、南西傾斜畑が果樹団地としてまとまった。
上旬降り続いた雪は積雪96cmに達し、鉄骨ハウスが倒壊した。
52. 5. 農業改良助長法が一部改正され、長年懸案となっていた農業者研修教育施設の法的位置づけがなされ、通称「県農業者大学校」と呼ばれることとなった。これによって、運営費、施設設備費が国庫負担金の対象となることになり設備の目安がつき易くなった。
- ・初年度認定分
 - マイクロバス 26人用
 - 乳牛成牛舎 鉄骨一部2階建、延べ560㎡
53. 2. 県費により鉄骨ハウスを再建した。
53. 3. 水田区画内を通る野菜施設横の町道が舗装された。
乳牛舎が完成し、乳牛を移動。
53. 4. 農業改良助長法の改正により、実習指導員（助手）が設置できることになり、2名の助手が発令された。
農業指導者養成所を廃止し、農村青年短期研修は大学校の業務に包含された。
53. 11. 開校50周年記念式典を挙行。初代校長早川一男氏ほか来賓・旧職員80名、卒業生130名が参集した。
- ・記念事業
 - 冊子「修農五十年」（会員名簿入り）の刊行
 - 記念碑の建立（碑名「修農」平林鴻三知事揮毫）
 - 記念品（関金町在住の岸信先生の手による秀峰大山の版画）の制作
54. 3. 乳牛舎に接して肉牛舎を建設。
54. 6. 成鶏舎を撤去。
54. 9. 西日本ブロック農業大学校校長会を開催する。
55. 6. 営農研修館に10名の中国農業研修生の事前研修を受け入れる。
56. 3. 新女子寮が完成し、これに併設された食堂・厨房が利用できることになったため、旧食堂は撤去。
56. 4. 井上校長退職により、第9代校長に疇佑志郎氏が就任する（営農研修館長兼務）。
農林水産省は、農業者と農業の指導者をあわせ養成する新農業大学校の整備方針を発表した。新農業大学校は、高等学校卒業者を主たる対象とする

- 養成課程と、農業青年・農業者等を対象とする研修課程を併設することとなった。
- 営農研修館に前年同様、中国農業研修生10名を受け入れる。
56. 5. 大栄中学校2年生の農業体験学習の受け入れ始まる。
56. 7. 新農業大学校への改組移行について検討を開始する。
57. 1. 野菜施設に接して野菜現場教室を完成した。これにより、生産現場に密着した学習が可能となった。
57. 2. 旧女子寮跡に新男子寮が完成した。
57. 10. 新農業大学校案が承認される。
58. 1. 時校長の退職により、第10代校長に清水寿美氏が就任する。
第3代営農研修館長に中山敬彦氏が就任する。

【県立農業大学校時代】

59. 4. 農業大学校が新発足し、養成課程に果樹科、野菜科、畜産科が置かれた。経大時代の教務課と経営課を統合して教育部が設けられ、校長・次長のほか、教育部に部長・教務主幹が設置された。
経大第1学年の修了者は、農業大学校第2学年に編入することになった。
校歌は原曲のまま作詞者により歌詞の一部を修正。
開拓地の傾斜荒廃地にギンナンの苗木を植栽。
60. 3. 果樹園に接して果樹現場教室が完成した。これにより、果樹についても生産現場に密着した学習が可能となった。
本校用地を取り込んで県道の拡幅改良工事が完成。
60. 4. 清水校長の退職により、第11代校長に田中道宣氏が就任する。
60. 5. 学生の安全運転協議会を組織する。
60. 1 関金町が、わかとり国体の山岳競技の開催地となったため、営農研修館を選手の宿泊に供用した。
61. 2. 本館を新築し、教育棟を整備し、また、本館、教育棟、寮、営農研修館を渡り廊下で接続した。
本館前の記念碑、樹木等を移転し、造園を行う。
61. 4. 中山館長の退職により、田中道宣校長が館長兼務となる。
61. 7. 農業大学校旗、クラブ旗を整備。
61. 8. 大山小学校6年生の体験学習を受け入れる。
61. 10. 乳牛舎の搾乳パイプラインを更新する。
62. 3. 乳牛舎の近くに畜産現場教室が完成した。これにより、各科とも生産現場に近いところでの学習が可能となった。また、畜魂碑を建立する。
62. 4. 田中道宣校長の退職により、第12代目の山崎洋次校長が営農研修館長を兼ねて就任する。
62. 5. 中国河北省と鳥取県の友好県省締結による河北省農業研修生受け入れ事業が実施され、事前研修、集合研修を通じて営農研修館に受け入れる。
62. 10. パソコン3台を導入し、コンピューター学習を開始した。

62. 11. 県農林水産祭の啓発展示コーナーに参加出品し、参観者の関心を呼ぶ。
63. 2. 牛舎のバーン・クリーナーを更新。
63. 3. 野菜科に養液栽培用ガラス温室1棟226㎡を設置した。
63. 5. 中国河北省農業研究生は前年同様に受け入れる。
63. 6. 鴨川中学校1年生の農業体験入学を受け入れる。
63. 10. マイクロバスを更新し、30人乗りとなる。
63. 12. パソコン3台を追加導入した。
- 平成元. 1. 8 昭和天皇が昭和64年1月7日崩御され、1月8日より年号が「平成」に改まる。
- 元. 3. 機械現場教室が完成した。これにより、機械整備舎の利用に比べ暖房、照明、騒音などの環境が改善され、修理用ピットも設けられたことから学習能率の向上が図られた。
- 元. 4. 研修課程を整備し、農業公開講座を開設することになった。この制度により、総合講座に1名を1年間受け入れることにしたほか、メニュー方式の短期コースを設けるとともに、従来からの農業機械研修も組み入れ拡充した。水田区画の土地について、地元天神野土地改良区からの要望を受けて県営圃場整備事業により、平成元年から一部平成3年分けて再整備することとなった。これにともない農家の圃場での飼料生産と稲作を行うことになった。
- 元. 5. 中国河北省農業研修生受け入れ事業は、7ヶ月のうち本校で6ヶ月を受け持つこととなり、研修が始まった。
- 元. 7. 5 創立60周年記念式典が挙行された。
西尾鳥取県知事、花本県会議員、坂田関金町長、小林県町村会長等来賓を始め、卒業生90名、旧職員20名、在校生等総勢210名で盛大に開催された。
・内容：式典、記念誌の発行、校門門柱版の鋳造、記念品（風呂敷）
- 元. 7. 14 校門に門柱版を取り付けた。
- 元. 7. 25 第25回献血運動推進全国大会において厚生大臣表彰を受賞した。
・知事室において伝達表彰を受けた。
- 元. 7. 28 八ヶ岳中央実践農業大学校で開催された全国農業大学校交換大会の技術競技において1位を獲得した。
- 元. 10. 水田ほ場整備が始まった。
2. 6. 9 強風によりビニールハウスのビニール破損、梨落果など被害を受けた。
2. 7. 県第6次総合計画における農業大学校整備の校内検討を開始した。
2. 9. 13 中国・四国ブロック校長・同窓会長会議を本県で開催した。
2. 11. 国家公務員3種試験5名合格、2種に1名が初めて合格した。
2. 11. 12 天皇即位の礼。
2. 11. 農業大学校運営協議会準備会を開催し、農大運営についての検討が始まった。
3. 1. 農業大学校運営協議会幹事会が開催された。
3. 2. 湾岸戦争勃発
3. 3. 22 農業大学校運営協議会設立委員会が県庁において開催された。
3. 4. 1 県の定期人事異動により、山崎校長は食品加工研究所長に転出、第13代目の原田信之校長が営農研修館長をかねて就任する。

3. 5. 24 農業大学校運営協議会アドバイザーグループ打ち合わせ会が開催された。
3. 9. 10 農業大学校運営協議会最終整備案が確定し、今後は本課サイドで検討されることとなった。
4. 7. 8 岐阜県立農業大学校との交流会（第1回）を本校で開催した。
毎年持ち回りで4回開催することとなった。
4. 7. 26 こども体験隊（小学6年70名）を1泊2日で開催した。
4. 8. 18 若い農業者就農対策事業（関金町実施）の一環として神戸大学学生9名が本校で体験学習をした。
4. 12. 1 中国黒竜江省から酪農研修生2名が来校し平成5年3月末日まで研修した。
4. 12. 18 プロジェクト発表会に初めて保護者も出席することにした。
5. 4. 1 県の定期人事移動により、原田校長は鳥取地方農林振興局振興課長に転任、第14代目の米澤輝夫校長が営農研修館長をかねて就任した。
5. 4. 27 関金町畜産祭りが本校で開催された。
5. 7. 13 第1回ふれあい農業学園構想研究会が県庁で開催され、新しい構想のもとでの整備に向けて具体的な取り組みが始まった。
5. 7. 26 ふれあい農業学園構想について丹青研究所と打ち合わせが行われた。
5. 8. 2 ふれあい農業学園構想検討会を本校で開催。以後数回にわたる打ち合わせを重ね計画を樹立した。
5. 8. “フルーツコレクション倉吉98”農業博覧会が倉吉市で開催された。
5. 9. 8 西日本ブロック果樹研修会を本校で開催した。
5. 11. 16 畑作振興施設（バイオテクノロジー施設）が農林水産省の補助で完成し、紫原農林水産部長ほか来賓の出席をえて竣工式を挙行した。
5. 11. 26 修農祭の一部がNHK“ふるさと秋列島”で全国生中継された。
山川アナウンサー、越前屋俵太等が来校した。
6. 2. 23 国のカリキュラム基準改定に伴い本校の内容改定作業に着手した。
6. 3. 16 第3回ふれあい農業学園整備委員会が開催され建物等の整備計画が承認され、管理運営体制については平成6年度に検討を行うこととなった。
6. 4. 女子学生が増え過去最高の7人が入学した。
6. 4. 27 ふれあい農業学園整備構想最終案が確定した。
6. 6. 29 ふれあい農業学園基本設計最終版を受領した。
6. 7. 校内の測量が始まった。
6. 7. 26 第3回岐阜農大との交流会を鳥取市少年自然の家で開催した。
6. 7. 整備後の管理体制についての検討を重ねた。
6. 8. 観測史上最高の記録的な猛暑。
6. 8. 建物の実施設計についての打ち合わせが続いた。
6. 10. 1 鳥取県畜産ふれあい祭りにおいて本校から泊小学校に貸し付けの牛「モモちゃん」が特別賞を受賞した。
6. 10. 17 中国地区農業大学校交流会において本校がバレーボールで優勝した。
6. 12. 農業改良助長法改正に伴うカリキュラム改定作業に取り組んだ。
7. 1. 13 ふれあい農業学園に関する庁内関係課長会議が開催され国際農業交流館の管理主体は農林水産部とすることに決定された。

- 7. 1. 記録的な大雪で県東部地区のなし園に大きな被害が発生した。
- 7. 1. 17 阪神・淡路大地震が発生した。
- 7. 1. 女子学生の急増（7年度の在学15名）に伴い男子寮2階を女子寮に改造することにした。
- 7. 1. 29 関金町農業振興大会が開催され本校から朝日暁子が意見発表した。
- 7. 2. 記録的な大雪（鳥取市89センチ、関金町50センチ）となった。
- 7. 3. 研究課程設置についての検討並びに打ち合わせを行った。
- 7. 5. ふれあい農業学園整備に伴う予算調整が行われた。
- 7. 5. 9 日本海テレビ番組「プラス1」の取材がなされた。
- 7. 6. 21 建築に障害となる樹木の移転作業が開始された。
- 7. 6. 20 竹本英行次長が八東町助役に選任され、後任に石田朋昭次長が就任した。
- 7. 7. 鳥取県青年の翼洋上セミナーに本校の学生4名が参加した。
- 7. 8. 17 高校生を対象に初めて「ふれあい農業スクール」を開催した。（2泊3日、23名参加）
- 7. 9. 建設主体工事の入札が行われ、西松建設・馬野建設・ダイトウ企業体が工事施工業者に決定された。
- 7. 9. 30 県畜産ふれあい祭りにおいて本校から泊小学校へ貸与している牛の「モモちゃん」が優良賞を受賞した。
- 7. 9. 憩いの森予定地の山林の樹木調査を開始した。
- 7. 10. 27 泊小学校貸与の「モモちゃん」が本校で出産した。泊小3年生が立ち会うと共に、報道陣も多数来校した。
- 7. 11. 1 管理教育棟他新築工事の安全祈願祭が挙行され、工事の安全を祈願した。
- 7. 11. 16 中国四国ブロック教務担当者会議を本校で開催した。
- 7. 11. 17 第1回関金町マラソン大会が本校を会場として開催された。
- 7. 12. 建築工事に向けて設計者、施工業者、学校が定例の工事打合せを週1回開催することになった。
- 8. 1. 22 日本海テレビ「農業大学校に女子学生急増」の取材が行われた。
- 8. 2. 14 中国四国ブロックプロジェクト発表会を本校で開催した。
- 8. 2. 研究課題のカリキュラム検討を行う。
- 8. 5. 9 BSSテレビ「農大新入生の1ヶ月」取材が行われた。
- 8. 5. ゆとりの時間を活用して校外ボランティア活動を開始した。
（地域と密着した活動：バス停清掃、梨の袋かけ等。）
- 8. 5. 14 短期研修を円滑に行うため短期研修運営連絡協議会を開催した。
- 8. 6. シンボルタワーの着工等工事が順調に進む。
- 8. 8. 27 県政番組の日本海テレビ取材が行われた。
- 8. 10. 9 受精卵移植スーパーカウの双子が生まれた、その後もすくすく育った。
- 8. 10. 11 韓国江原道農民教育院研修生41名が来県した。
- 8. 10. 26 都会からの農業体験セミナーが本校で初めて開催された。
- 8. 11. 19 野菜・花き現場教室が完成した。
- 8. 11. 園芸・畜産試験場併設の研修所を、本校専門技術課程とすることについての調整が続けられた。

9. 1. 旧食堂・学生寮の取り壊し作業が始まった。
9. 2. 新校舎の完成や積極的なPRが奏効し農業大学校になって定員（30名）を上回る34名の応募者があった。
9. 2. 養成課程の教科に初めて林業関係の講義を取り入れた。
9. 2. 24 初めて専門技術課程の入学試験を実施し2名が合格した。
9. 3. 10 初めて研究課程の入学試験を実施し3名が合格した。
9. 3. 学校整備のうち先に完成した学校教育部門の建物へ移転作業が始まった。
9. 3. 28 「鳥取県立農業大学校管理規則の一部を改正する規則」が公布された。（鳥取県規則第26号）
- これにより
- ☆養成課程の花き科の設備
 - ☆研究過程の設置
 - ☆専門技術課程の設置
 - ☆教科内容・時間数
- などがあたらしく定められた。
9. 4. 学校教育部門の建物・施設の供用を開始した。
9. 4. 11 新装となった体育館にて入学式を挙行了した。
9. 4. 全国農業大学校機関誌NOHO新聞の取材が行われた。
9. 5. 31 県政テレビ「とりっ子クラブ」の番組の取材が行われた。
9. 7. 山陰夢みなと博開幕
9. 8. 中型バスを新たに購入した。建築工事も急ピッチで進んだ。
9. 9. 2 定礎式を挙行、揮毫は西尾知事、ボックス内に学校の記録等を封入した。
9. 9. 一時移転していた樹木の復元作業が始まった。
9. 9. 25 国際農業交流館等の引き渡しが行われ、新しい学校案内も完成した。
9. 10. 16 中国地区農業大学校スポーツ交流会を本校で開催した。
9. 10. 28 農業大学校落成式を挙行了した。
- ふれあい農業学園の名称で進めて来た学校整備も全て完了し、落成式を河本副知事他多数の来賓出席のもと盛大に行われた。
- 記念講演：アン・マクドナルド女史、
- アトラクション：獅子舞、韓国民謡舞踏、さいとりさし
9. 11. 新たに購入した林地の檜を間伐、製材し手作りで牛小屋を建築した。
9. 12. 16 創立70周年記念事業役員会を開催し、本格的な活動を開始した。
9. 12. 27 県政番組BSS“とりっ子クラブ”10大ニュースの9位に農業大学校がはいった。
10. 1. 21 建設テレビジョン“大規模木造建築探訪”の取材のため東京より来校。
10. 2. 5 パソコンを活用して第1回情報処理研修を実施した。
10. 3. 14 国際農業交流館で“日本文化・農業教室”を開催、外国からの交流員留学生等が日本文化・農業について理解を深めた。
10. 3. 14 赤崎町の家畜市場で開催された第13回B&Wショー未經産の部において本校から出品のカレッジヒル ローマン クローネ クイーン号がグランドチャンピオンに輝いた。
10. 5. 18 モンゴル国中央県より農業技術研修員2名来校、8月14日まで農大で研修

- を実施。エルデネバト（男性）、アリマントヤ（女性）
10. 5. 19 島根農大との交流会を本校で開催した。
10. 6. 農業大学校紹介ビデオ「新しき農の時代」が完成した。
10. 7. 10 普及事業50周年記念大会が県民会館で開催された。
10. 7. 鳥取女子短期大学の学生による図書の整理がなされ図書館も充実した。
10. 7. 29 鳥取県新規採用教職員研修が定着し好評であった。テレビ・新聞等報道関係にも取り上げられた。
10. 9. 19 ふれあい国際理解講座を英国展示会（2週間）と合わせて開催した。
10. 10. 7 平成10年度鳥取県景観大賞に農業大学校が選ばれた。
10. 10. 16 モンゴル国中央県ゴンビーン、ダシュレンツェン副知事が来校された。
10. 10. 25 平成10年度「ワンパク農業スクール」「日曜農業教室」（6月から10月まで第4日曜日開催）盛会裏に終了した。
10. 10. 26 中国地区農業大学校校長会議を本校において開催した。
10. 11. 20 創立70周年記念式典が農業大学校体育館で開催され、西尾知事の列席のもと盛大に開催された。元農業大学校長田中道宣氏の「山畑百姓10年とこの頃おもうこと」と題して記念講演が行われた。
11. 2. 22 学生教育・生活指導を強化するため校内ワーキンググループで検討されていた改善事項がまとめ、舎監と指導職員との定期的な協議、学生女子会の設立、学生会規約の改正が職員会議で決定された。
11. 4. 1 米澤輝夫校長が定年退職され、第15代有松幸登校長が就任された。
11. 4. 2 中国六県ホルスタイン改良協議会主催の第15回中国地区B & Wショーにおいて、本校出品牛カレッジヒルアパッチクローネラブリーが未經産リザーブグランドチャンピオンを受賞した。
11. 6. 3 関金町身体障害者福祉協会主催の身体障害者・農業大学校生「ふれあいグランドゴルフ交流会」が円形広場で開催され、養成課程1年生31名が交流を深めた。
11. 11. 10 （国立）韓国農業専門学校日本研修団35名が来校、国際交流館に宿泊し、本校学生会との交流会、日韓農業青年シンポジウムが開催された。
11. 12. 1 鳥取県と韓国江原道友好5周年を記念して、江原道金知事と本県片山知事の一行が本校を見学した。
11. 12. 14 東京虎ノ門パストラルにおいて第10回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校研究課程1年安食千恵子さんが応募した作文が金賞を受賞した。
12. 2. 22 開学記念日の記念行事として、学生会が主催して「来て、見て、作って、ふれあい交流会」と銘打ち関金町内の高齢者28人を招待して、学生といっしょにソバ打ち、中華饅頭作り、校内見学を実施した。この年から開学記念行事は学生会の自主的活動の一環として実施されることになった。
12. 2. 23 企画部女性青少年課主催の「青年と知事が語る会」が本校大教室で開催され、「農業青年の夢」をテーマに片山知事との懇談会が実施された。本校からは果樹科1年福永ルミ子さん、畜産科2年別所昌治君が意見発表を行った。

12. 2. 24 全国農業大学校協議会主催の全国農業大学校プロジェクト発表会が東京で開催され、本校から養成課程果樹科2年山根浩幸君が「若木でのナシゴールド二十世紀の適正着果基準の策定」と題して発表、全国農業大学校協議会長賞を受賞した。
12. 4. 1 専門技術課程に林業技術者養成のための森林科が新設され、担当する教務主任1名と非常勤職員1名が配置された。入学する1期生は5名。
12. 5. 22 県・市町村行政懇談会が本校国際交流館ホールで開催され、知事ほか県内市町村長が参集し農業大学校施設を見学した。
12. 10. 23 この年から養成課程2年生の修学旅行先が、国際感覚の涵養を目的に韓国となり、ソウルを中心に実施され、国立農業専門学校の見学も実施された。
13. 1. 25 東京虎ノ門パストラルにおいて第11回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、論文の部で本校研究課程2年安食千恵子さんが「私のグリーン・ツーリズム論」で優秀賞を受賞した。また作文の部で研究課程1年尾崎佐和子さんが金賞、養成課程果樹科2年川上真司君が銅賞を受賞した。
13. 2. 21 平成5年から検討されていた「21東ほうきふるさと構想」の一環としての関金町大山池周辺での農業公園構想が、集客への危惧、財政状況等から計画の見直しが進められ、平成9年から10年にかけて田園空間博物館整備事業を活用し農業資料館、体験農園等施設を農大周辺に整備する方向で県農村整備課が計画を進めていたが、広く一般県民からの意見を聴くため、「農業体験館及び体験農園のあり方に関する意見交換会」が農業大学校会議室で開催された。
13. 4. 1 有松幸登校長が定年退職され、第16代校長足立恵一氏が就任された。組織定数が改正され、総務課主任が1名減となり、それまで教務研修科として3名と配置されていたのが、教務科と研修科に分離され、それぞれ2名ずつ配置された。
13. 7. 11 懸案であった女子寮の建設に向けて、県経営指導課は農業研修教育施設整備事業（国補事業）で取り組むべく農政局との協議を続けていたが、建設費388百万円で基本設計、概算工事価格ができあがり農政局経営課長と県経営指導課長との協議がなされ、平成13年度、14年度の2か年にわたって取り組むことが確認された。
13. 10. 17 西日本ブロック農業者研修教育施設指導職員「野菜部門」担当者会議が米子市を中心に開催され、西日本ブロック17県からの参加があった。
13. 10. 29 農業資料館、体験農園等施設の整備計画に関連して、校内で検討されていた農業大学校施設の拡充整備に関する計画案の検討会が本校で開催され、鳥取短大中嶋教授ほか外部有識者の意見を求め、実践教育、教育環境の整備と併せて周辺地域との連携方策について協議された。
13. 11. 23 修農祭に修農会が初めて農産物販売コーナーを設けナシ、柿、野菜、米などの販売がOBによって実施されるようになった。
13. 12. 27 第2回目の農業大学校の拡充整備に関する検討会が外部有識者の出席のもと開催された。

14. 1. 25 東京虎ノ門パストラルにおいて第12回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校研究課程1年小林由幸君が応募した作文が銀賞を受賞した。
14. 3. 7 第3回目の農業大学校の拡充整備に関する検討会が外部有識者の出席のもと開催された。そこで農大研修教育機能整備方針（案）が協議され、平成14年度からの教育カリキュラム改正、研究課程の派遣教育方法の見直し、水稲等作物教育の強化、研修指導職員の新規配置、多様な体験メニューの整備などを実施する方向でまとまった。
14. 4. 1 組織定数が改正され、研修科改良普及員1名が増員された。改正された新カリキュラムが施行された。主な改正点として、養成課程ではゼミ方式科目を導入、選択科目の増加（作物Ⅱ、農業経営演習）を行い、研究課程ではそれまでの11か月の試験研究派遣期間を2か月に短縮し、2学年のプロジェクト課題設定演習は農業大学校で実施することとなった。
14. 5. 10 離転職者を対象とした県立倉吉高等技術専門校農業科の訓練が、本校で実施されることとなり入校式が行われた。第1期入校生は3人。
14. 11. 6 県市場開拓課の仲介により、兵庫県加古川市にあるスーパーマーケット（イトーヨーカ堂）での販売体験実習が始まり、果樹、野菜、花きの本校産農産物を養成課程2年生が販売した。
15. 1. 東京虎ノ門パストラルにおいて第13回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校養成課程1年山本祐一君が応募した作文が銀賞を受賞した。
15. 3. 平成14年4月から着工していた寮室30室3階建ての女子寮が完成し、女子が移動した。同時にそれまで入寮できなかった研究課程、専門技術課程の学生も入寮できるようになった。
15. 4. 1 組織定数の改正により、教務科に作物担当の講師が1名配置されることとなった。同時に教育研修部職員が、教授（課長補佐級）、助教授（係長級）、講師という職名に変更された。
15. 10. 22 第21回中国ブロック農業大学校研修生のつどいが本県で開催され、赤碕町運動公園多目的広場、船上山少年自然の家を主な会場として、中国地区6農業大学校学生のスポーツ交流が行われた。
16. 4. 1 県組織改編により、農業大学校が農林水産部農政課の出先機関から農林水産部の本課の機関として位置づけられた。
16. 4. 1 鳥取県教育委員会所管の平成16年度現職教育内地留学により県立日野高等学校教諭坪倉寿樹氏が本校で6か月間バイオ、花きに関する課題研究を実施することとなった。
16. 4. 1 鳥取県立農業大学校の設置及び管理に関する条例が一部改正され、入学選抜手数料（2,200円）、入校料（5,550円）が新設され、年間授業料が12,240円から108,000円に引き上げられることとなった。
16. 11. 12 NHK総合テレビ番組「まるごとワイド鳥取」大学キャラバンで、農業大学校のキャンパス、各科教室訪問などが生中継され、県下に放映された。
17. 4. 1 県定期異動により足立校長は西部農林局長に転任、第17代校長真山育雄氏

- が就任された。
17. 5. 25 平成15年度から国の農業研修教育・農業総合支援センター施設整備事業を活用して進めてきた農業学習館が完成し、地元鴨川中学校の生徒の体験学習の機会に落成式を行った。
17. 7. 28 中国四国ブロック農業大学校教務担当者会議が、倉吉市グリーンスコールせきがねで開催され、29日校内見学が行われた。
17. 11. 28 本校で職業安定法第33条の4項に基づく地方公共団体無料職業紹介事業を実施することになり、下中教育研修部長が職業紹介責任者に認定され職業紹介事業が開始された。
17. 12. 21 平成16年決算審査特別委員会報告が議会に提出され、「農業大学校においては研修部門の強化など一定の評価をるところであるが、卒業生の就農率が24%で年々減少傾向にあることは、費用対効果の面から憂慮すべき状況である。今後は担い手の育成を図ることを検討すべきである。」という文書指摘がなされた。
18. 2. 16 中国四国ブロック農業大学校プロジェクト発表会が倉吉市グリーンスコールせきがねで開催され、29日校内見学が行われた。
18. 4. 8 平成16年度決算審査特別委員会の文書指摘を受けて、農業大学校の教育研修体系の基本的な見直しを進めることとなり、①教育課程カリキュラム、②魅力ある農業大学校（専修学校化の是非）、③全寮制教育の3課題について校内ワーキンググループで検討素案を作成し、外部有識者で構成する農業大学校機能強化検討懇談会で意見ききとりをしながら成案化することとなった。
18. 6. 12 決算審査特別委員会指摘を受け、若年未就労者（ニート・フリター）を対象とした農業体験研修（土と風の体験講座）を実施し1名の参加があった。
18. 7. 22 平成18年度自治体国際協力促進事業（モデル事業）としてモンゴル中央県農業支援多地域間プロジェクト事業が新たに始まり、これまでの本校における農業研修をフォローアップするため、山口祐助助教授及び山崎正人助教授がモンゴル中央県に派遣され、現地での技術指導にあたった。
18. 7. 27 第1回農業大学校機能強化検討懇談会を開催し、①教育課程カリキュラム、②専修学校化について協議された。
19. 1. 16 第2回農業大学校機能強化検討懇談会を開催し、20年度に向けた具体的な教育研修体系の見直し及び専修学校化について協議された。
19. 1. 19 県議会経済産業常任委員会において、「農業大学校の教育研修体系の見直し」について報告がなされ、現状の養成課程、研究課程、専門技術課程の学生教育と研修課程を一元化し、19年度から養成課程を専修学校化することなどが確認された。
19. 1. 23 認定農業者や農業法人等の経営感覚を養成するため、新規に「農のスペシャリスト講座」を開講し、1月23日に農業法人経営管理講座、2月16日にマーケティング戦略講座を開催したが、延べ126名の多数が受講した。
19. 2. 1 環境保全型の農業を学習するため、取り組んでいた本校農場生産物の鳥取県特別栽培農産物認証の登録申請が、トマト類で認可された。

19. 2. 2 東京新高輪プリンスホテルにおいて第17回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校養成課程1年山本将人君が応募した作文が銅賞を受賞した。
19. 2. 9 第3回農業大学校機能強化懇談会が開催され、20年度に向けて全寮制を希望入寮制に変更することについて協議された。
19. 5. 8 平成9年度から実施していた日曜農業教室を廃止し、20年度から実施予定の短期研修科の試行として新規就農を目指す人を対象とした「アグリスタートアップ研修」を開始し、開講式を平井知事列席のもと開催した。
19. 7. 22 第9回全国和牛能力共進会鳥取県最終予選会が、鳥取県中央家畜市場で開催され、3区（若雌の2）に本校から畜産科2年山形俊樹君と「ちよ」が出場し、健闘したが惜しくも準首席となり全国共進会の出場権は得ることができなかった。
19. 8. 25 モンゴル中央県派遣事業により、野菜科盛山勝一郎講師がモンゴル中央県に9月1日まで派遣され、現地での野菜技術指導に携わった。
19. 10. 27 平成19年度鳥取県畜産共進会が鳥取県中央家畜市場で開催され、和牛種牛の部第3区（若雌）に、本校から畜産科2年山形俊樹君と「ちよ」が出場し首席となり、さらに和牛種牛の部グランドチャンピオン賞を受賞した。
19. 10. 30 境港市夢港タワーにおいて、鳥取県モンゴル中央県友好交流10周年記念式典が行われ、真山育雄校長が列席した。このとき両県の友好提携協定が継続提携され農業研修事業は継続されることとなった。
19. 12. 16 平成20年度入学生一般入学前期入学選抜試験が実施され、新規に設けられた社会人特別入学枠に2名の社会人経験者が受験し合格した。また平成20年2月17日に実施された後期試験において1名が受験し合格した。
19. 12. 19 モンゴル中央県農業局長が来校し、学校施設の見学をした。このさい農業研修の受け入れについて感謝の言葉を述べられた。
20. 2. 1 東京虎ノ門パストラルにおいて第18回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校養成課程果樹科1年植原証が銀賞、研究課程1年数数馬明展君が銅賞を受賞した。
20. 2. 26 本校養成課程卒業生に専門士（農業専門課程）の称号を付与することを認可する文部科学省の官報が告示された。これに付随して3月7日に鳥取県立農業大学校管理規則が一部改正され、正式に専修学校として位置づけられ、養成課程卒業証書の文面に専門士（農業専門課程）の授与が謳われることとなった。
- 養成課程（22名）、研究課程（1名）、専門技術課程（1名）の卒業式を挙行した。養成課程の卒業生には専門士（農業専門課程）の称号が与えられた。
20. 4. 1 真山育雄校長が定年退職され、第18代校長藤原明康氏が就任された。県組織定数の改正により、総務課で1名減、教育研修部で2名減となり、正職員定数は19名となった。
20. 4. 1 鳥取県立農業大学校の設置及び管理に関する条例及び鳥取県立農業大学校管理規則の一部改正が施行され、次の事項が改正された。
- ①養成課程の果樹科、野菜科、花き科、畜産科が養成課程農業経営学科と

なり、果樹コース、野菜コース、花きコース、作物コース、畜産コースの5つの専攻コースとなった。②研究課程、専門技術課程は廃止された。③研修課程のうち就農研修部分は短期研修科となり3か月、6か月、12か月の3コースとなった。④授業料が月額108,000円から111,600円に引き上げられた。また短期研修科に受講料（月額10,000円）を徴収することとなった。⑤講義の聴講制度を導入し、聴講料1時限につき125円徴収することとなった。⑥養成課程の全寮制が廃止され希望者に対する許可入寮制となった。

20. 4. 15 養成課程農業経営学科の入学式を挙行了。新入生21名のうち3名が、新たに導入した「社会人特別入学制度」による入学者であった。
20. 4. 22 新たに設置した「研修課程短期研修科」の第1回目の開講式を行った。研修生は、3ヶ月コース6名、12ヶ月コース1名の計7名であった。
20. 5. 15 モンゴル中央農務局の農業専門家トグスオチル・バヤルフー氏が、7月10日までの約2ヶ月間、野菜を中心とした研修をされた。
20. 5. 26 農林経済・流通・マーケティング分野などの著名な講師を全国から招いて実施する「オープンカレッジ（公開講座）」（年10回開催）を開始した。第1回目の講義は、鳥獣害対策専門員の平田滋樹氏による「鳥獣被害の現状と具体的な防除法」であった。
20. 6. 17 学生が丹精込めて作った農産物を自らの手で販売する「農大市」が実現し、約60名のお客様が訪れた。学生自らが商品のパッケージ、ポップ広告、販売等を行った（本年度は7回開催）。
20. 7. 2 本年度第2回目の「農大市」を開催し、約150名のお客様が農産物を購入された。
20. 7. 12 平成20年度モンゴル中央農務局派遣事業により、野菜科盛山勝一郎講師が、モンゴル中央農務局に7月19日まで派遣され、現地で野菜技術指導を行った。
20. 7. 15 本年度第3回目の「農大市」を開催し、約130名のお客様が農産物を購入された。
20. 7. 29 高校生等を対象とした「オープンキャンパス（ふれあい農業スクール）」を7月30日まで1泊2日の日程で、本校を会場に開催した。参加者は23名であった。
20. 8. 2 鳥取県内で農業を始めたいという人を対象とした「ふるさと体験ツアー」を8月3日まで1泊2日の日程で、本校と現地を会場に新たに開催した。担い手育成基金との共催で行い、参加者は16名（うち8名が県外者）であった。
20. 8. 5 農業大学校西日本ブロック作物担当者会議が8月6日までの2日間、本校及び県内で行われた。
20. 8. 22 本年度第4回目の「農大市」を開催し、約70名のお客様が農産物を購入された。
20. 9. 10 本年度第1回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程1年の11名が量販店での販売を学んだ。
20. 9. 17 本年度第5回目の「農大市」を開催し、約60名のお客様が農産物を購入された。

20. 10. 8 第26回中国ブロック農業大学校研修生のつどいが10月9日までの2日間、蒜山高原で開催され、ソフトボールの部で本校が3回目の優勝を果たした。
20. 10. 15 本年度第6回目の「農大市」を開催し、約110名のお客様が農産物を購入された。
20. 10. 19 創立80周年記念式典が農業大学校体育館で開催され、藤井副知事の出席のもと盛大に開催された。式典終了後には、山陰国民高等学校設立期成同盟会の副会長であった倉繁良逸氏が開校式当日に読み上げられた「山陰国民高等学校設立経過並びに工事報告」を公開するオープンセレモニーが行われた。
20. 11. 6 本年度第2回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程1年の10名が量販店での販売を学んだ。
20. 11. 23 恒例の修農祭が学生会の主催で開催された。今回初めて外部の音楽グループ「届け人」によるライブが行われた。
20. 12. 10 本年度第7回目の「農大市」を開催し、約150名のお客様が農産物を購入された。
20. 12. 20 日本農業技術検定協会（事務局は全国農業会議所）主催による日本農業技術検定2級試験が実施された。本校からは15名が受験し、9名が合格した（全国の合格率は約20%）。
21. 1. 30 第19回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が東京虎ノ門パストラルで開催され、作文の部で本校養成課程1年の植岡壮平君が応募した作文「失敗を乗り越えて」が銀賞を受賞した。
21. 2. 5 平成20年度中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会が2月6日までの2日間、徳島市で行われ、本校代表として発表した養成課程2年の山本智史君と植原証君がともに優秀賞を受賞した。
21. 2. 25 第11回全国農業大学校等プロジェクト発表会が2月26日までの2日間、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。中国四国ブロック代表として発表した研究課程2年の数馬明展君が優秀賞（農林水産省経営局長賞、研究課程で1位）を、養成課程2年の山本智史君と植原証君がそれぞれ優良賞（全国農業大学校協議会長賞）を受賞し、本校始まって以来の快挙となった。
21. 3. 12 養成課程及び研究課程の卒業式を挙行了。養成課程26名、研究課程3名が2年間の学業を修業した。養成課程の26名には専門士（農業専門課程）の称号が与えられた。
21. 4. 9 養成課程農業経営学科の入学式を挙行了。新入生は21名であり、各コースの入学生数は、果樹4名、野菜8名、花き3名、作物4名、畜産2名であった。
21. 4. 21 短期研修科3月コースと12か月コースの開講式を行った。3か月コース4名、12か月コース7名、計11名の受講者があり、そのうち10名が野菜専攻、1名が花き専攻であった。
21. 5. 28 恒例の島根県立農業大学校との交歓会を29日までの2日間、本校を開場で開催した。2日目のソフトボール大会では本校Aチームが優勝した。

21. 6. 9 前期技術競技を実施した。1年生の上位入賞者は、奥谷君、徳山君、松上君、同2年生は、中谷君、植岡君、今村さん（社会人）であった。
21. 6. 18 本年度第1回目の「農大市」を開催し、約90名のお客様が学生たちの生産した農産物を購入された。本年度からレジスターをバーコードつきのものに代えた。
21. 7. 2 本年度第2回目の「農大市」を開催し、約120名のお客様が農産物を購入された。
21. 7. 16 本年度第3回目の「農大市」を開催し、約150名のお客様が農産物を購入された。今回は新聞、防災無線のほかにNHKでも放送されたこともあって多くの来場者があり、レジは大混乱した。
21. 7. 18 本年度第1回目の「ふるさと就農体験研修」を19日まで1泊2日の日程で、担い手育成基金との共催で開催した。県内で就農を希望される21名（うち8名が県外者）が本校と現地を中心に研修をされた。
21. 7. 21 短期研修科3月コースと6か月コースの開講式を行った。3か月コース7名、6か月コース3名、計10名の受講者があり、すべてが野菜専攻であった。
21. 7. 25 本年度第1回目の日本農業技術検定2級試験が実施された。本校からは3名が受験し、2名が合格した。（全国の合格率は15%）。
21. 7. 28 高校生等を対象とした「オープンキャンパス」を7月29日まで1泊2日の日程で、本校を会場に開催した。参加者は22名であった。
21. 8. 24 作物コースと畜産コースの2年生が、9月18日までの日程で農家留学研修を実施した。果樹、野菜、花きの各コースは1週間遅れて8月31日から9月25日までの実施となった。東は長野県から西は熊本県までそれぞれ先進農家に滞在し、実際の農業経営や農家生活を体験した。
21. 8. 27 本年度第4回目の「農大市」を開催し、約80名のお客様が農産物を購入された。
21. 9. 9 本年度第1回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程1年の10名が量販店での販売を学んだ。
21. 9. 14 モンゴル中央県の研修生ミヤグマル・ダシドラム氏が11月6日までの約2か月間、本校でキュウリ、トマトなどの野菜を中心に研修をされた。
21. 9. 25 本年度第5回目の「農大市」を開催し、約60名のお客様が農産物を購入された。
21. 10. 7 第27回中国ブロック農業大学校研修生のつどいが10月8日までの2日間、本校を会場に開催された。運営は本校の学生たちが中心となり、素晴らしい交流会となった。2日目は台風の影響で雨天となり、ソフトボールはソフトバレーボールに代わった。本校は昨年が続いて2連覇を達成し、卓球の部でも第3位となった。
21. 10. 16 本年度第6回目の「農大市」を開催し、約70名のお客様が農産物を購入された。
21. 10. 20 短期研修科3月コースの開講式を行った。受講者は6名であり、全員が野菜専攻であった。本年度の受講者はこれで27名となり、昨年度全期の24名を越えた。社会情勢の急速な変化により就農希望者が増加していることが

- うかがえた。
21. 10. 23 養成課程農業経営学科の入学選抜試験（推薦入学）を実施した。15名が受験し、全員が合格した。
21. 11. 5 本年度第2回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程1年の11名が量販店で実習した。
21. 11. 14 本年度第2回目の「ふるさと就農体験研修」を15日まで1泊2日の日程で、本校と現地を会場に開催した。担い手育成基金との共催で行い、参加者は21名（うち11名が県外者）であった。
21. 11. 19 本年度第1回目の「農のスペシャリスト講座」を開講した。今回のテーマは「いちご・トマトの栽培技術」であり、いちごの高設栽培と大玉トマト栽培のポイントについて学んだ。
21. 11. 20 後期技術競技を実施した。1年生の上位入賞者は、奥谷君、高山君、徳山君、同2年生は、中谷君、植岡君、今村さん（社会人）であった。
21. 11. 23 修農祭が学生会の主催で開催された。小春日和の絶好の天気となり、約1,200人のお客様で賑わった。
21. 12. 3 本年度第2回目の「農のスペシャリスト講座」を開講した。「食の安全・安心発信」が今回のテーマであり、GAPについて学んだ。
21. 12. 4 本年度第3回目の「農のスペシャリスト講座」を開講した。「マーケティング戦略」が今回のテーマであり、パッケージづくり等について学んだ。
21. 12. 10 「鳥取へIJU！アグリスタート研修事業」（緊急雇用創出事業）の一環として農大が担当する「農業大学校サポート研修」を開始した。10日から11日まで「農業基礎集中講座」、14日から22日まで「農業機械研修」を実施した。
21. 12. 10 本年度第7回目の「農大市」を開催し、約70名のお客様が農産物を購入された。
21. 12. 13 養成課程農業経営学科の入学選抜試験（一般入学前期及び社会人特別入学前期）を実施した。10名が受験し、9名が合格した。
21. 12. 19 本年度第2回目の日本農業技術検定1級・2級試験が実施された。
22. 1. 19 卒業論文発表会を開催した。審査の結果、第1位が吉川徹君、第2位が植岡壮平君、第3位が藤原綾さんと奥田慎也君に決定した。
22. 1. 29 第20回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会がメルパルク東京で開催され、作文の部で本校養成課程2年の中谷好孝君が応募した作文「桃源郷を夢見て……私が目指す果樹栽培への挑戦」が銅賞を受賞した。
22. 2. 2 平成21年度中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会が2月3日までの2日間、山口県防府市で行われ、本校代表として発表した養成課程2年の植岡壮平君が優秀賞を受賞した。
22. 2. 14 養成課程農業経営学科の入学選抜試験（一般入学後期及び社会人特別入学後期）を実施した。11名が受験し、全員が合格した。
22. 2. 23 第12回全国農業大学校等プロジェクト発表会が2月24日までの2日間、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。中国四国ブロック代表として発表した養成課程2年の植岡壮平君が優良賞（全国農業大学校

- 協議会長賞)を受賞し、本校は2年連続の快挙となった。
22. 3. 11 養成課程の卒業式を挙行了。養成課程21名が2年間の学業を修業した。養成課程の21名には専門士(農業専門課程)の称号が与えられた。
22. 4. 1 藤原明康校長が定年退職し、第19代校長として下中雅仁校長が就任した。H22、23年度は本校校長が中四国ブロック農大協会会長及び全国農大協副会長を務めた。
- 従来の職名「助教授」が「准教授」に改名された。
22. 4. 6 養成課程に30名の定員を上回る33名の新生が入学した。
22. 9. 17 前年度まで大阪ヨーカー堂で実施していた流通販売実習を日吉津のイオンに変更して実施。
22. 10. 5 中国ブロック農業大学校研修生(鳥根県)のつといでソフトボール優勝。
23. 1. 22 全国農大プロジェクト発表会に合わせて初めての意見発表会を同時開催することになり、第1回校内意見発表会(養成課程1年生)を開催した。
23. 1. 27 中国四国農業大学校プロジェクト発表会(高知県)で開催され、中国ブロック意見発表会が同時開催された。
23. 1. 27 養成課程野菜コース1年生の近藤昌平さんが、ヤンマー学生懸賞作文の銅賞に入賞した。
23. 2. 22 開校記念行事として、校長先生が本校の生い立ちとその後の変遷について講話し、保護者会の後援の下食堂の協力を得て校内生産物をメインにした料理でバイキング形式の昼食会を開催した。
23. 2. 22 全国農業大学校プロジェクト発表会で中四国代表として発表した養成課程野菜コース2年の徳山達也さんが特別賞を受賞した。
23. 3. 26 3月11日に発生した東日本大震災の被災者支援に花き科遠藤英先生が石巻市に派遣(3/26~4/1)された。
23. 4. 1 前年度に見直し検討してきた新カリキュラムを養成課程1学年に適用実施した(2学年は移行措置として旧カリキュラムを継続実施)。主な内容は、実習時間の増、6次産業化や社会貢献活動のカリキュラムへの導入など。
23. 6. 22 学校の外部評価(評価委員3名)を開始した。
23. 7. 18 農家等留学研修を一斉実施から7月中下旬~9月末の期間の適当な時期に実施可能とした。
23. 8. 22 果樹科河原拓先生が鳥取県職員災害応援隊(第28陣)として東日本大震災の避難所支援のため石巻市に派遣(8/22~31)された。
23. 8. 22 東日本大震災で大きな被害を受けた東北3県にある農業大学校宛に、学生会が激励の寄せ書きを贈った。
23. 10. 17 校内マラソン大会を復活開催した(一方で、7月の海水浴は廃止した)。コースは、男子:大山池往復、女子:松河原果樹団地往復。
24. 2. 21 全国農業大学校プロジェクト発表会で中四国代表として発表した養成課程野菜コース2年近藤昌平さんが特別賞を受賞した。鳥取農大として2年連続の特別賞受賞。
24. 4. 1 県の定期人事異動により下中雅仁校長は農林総合研究所長に転出し、第20代校長として安養寺寿一校長が就任した。

24. 8. 31 6次産業化の取り組みの一環として農大ブランド第1号に野菜科2年生橋叶さんのミニトマトゼリー“想いは叶う”を認定した。
24. 9. 23 流通販売実習を東部地区(“地場産プラザわったいな”)でも初めて開催した。
24. 10. 16 校内マラソン大会に替えて校内駅伝大会(職員を含む専攻コース対抗による校内20周回)を開催した。
24. 10. 25 長崎県で開催された第10回全国和牛能力共進会に鳥取県代表として本校から2頭を出品した。農業大学校からこの大会に出品するのは全国初。
25. 2. 19 全国農業大学校プロジェクト発表会で中四国代表として発表した養成課程野菜コース2年岡田有生さんが特別賞を受賞した。鳥取農大として3年連続の特別賞受賞
25. 9. 21 第30回全国都市緑化フェア(水と緑のオアシスとっとり2013)が、鳥取市の湖山池公園を主会場に開催され、本校花きコースも『「農」ヲ感じテ…』と題して農大の風景をデザインしたガーデンを展示した。
25. 12. 12 管理棟や学生寮の給湯用の木質チップボイラー施設が完成し、点火式に招待した関金小学校の児童と学生会役員が種火をたいまつりレーし、ボイラーに点火した。この他、野菜・花きハウス暖房用に木質ペレットボイラーや地中熱ヒートポンプも完成した。
26. 3. 27 野菜コース職員がプロジェクト指導の功績で農林水産部長表彰を受賞した。平成20年度から6年連続で本校学生が中四国の代表として全国プロジェクト発表会で発表。特に野菜コース学生を平成22年度から4年連続の出場に導き、うち3名が上位入賞に輝いた。その指導の成果が評価された。
26. 4. 1 県定期異動により安養寺寿一校長は農林水産部次長に転任、第21代校長として爲計田ひろみ校長が就任した。
26. 8. 5 農業法人等への雇用就農が重要な進路の一つとなる中、初めて雇用就農情報交換会を開催し、農業法人等と学生・研修生の情報交換及び個別相談を行った。求人を考える農業法人等15社の参加があった。
26. 8. 7 モンゴル国中央県知事ドルジ・バヤルバト氏が来校された。
26. 8. 17 モンゴル中央県農業専門家派遣事業により、野菜コース竹内亮一講師がモンゴル中央県に8月24日まで派遣され現地での野菜技術指導に携わった。
26. 9. 自営就農者及び雇用就農者の大幅な増加を目指して、新たに就農を希望する社会人を対象とした農大研修の見直し拡充について検討、協議を開始した(政策戦略事業「次世代を担う農業人材育成研修事業」)。
27. 1. 牛舎のTMRミキサーを更新した。自走式タイプの導入で餌やりが大きく効率化された。
27. 2. 10 初めて「花育」活動に取り組み、花きコースの学生・研修生が関金保育園の年長クラスの園児たちに花の寄せ植えを教えた。
27. 2. 13 全国農業大学校等プロジェクト発表会が東京で開催され、養成課程野菜コース2年の嶋田雅俊さんが「小型パブリカ利用による着色安定と経営改善の検討」と題して中国四国ブロック代表として発表し優良賞を受賞した。
27. 3. 9 平成26年度養成課程農業経営学科の卒業式を行い20名の卒業生を送り出した。自営就農者5名(研修後の就農予定者を含む)雇用就農者11名で、就

- 農率は80%と高い値となった（近年50%前後で推移）。
27. 4. 1 就農を目指す社会人向けの研修を改編して充実させるに伴い、研修科に研修調整員（非常勤職員）2名（うち1名は8月採用）、訓練指導員（非常勤職員）2名（うち1名は8月採用）が配置された。具体的には、短期研修科（3か月、6か月、12か月の研修）を改め、講義と校内での実習によって農業の基礎的知識と栽培（飼育）の基本技術を学ぶ12か月間のスキルアップ研修、1年間先進農家の元で実践的に学ぶ先進農家実践研修、3か月間のアグリチャレンジ研修（公共職業訓練）の3種類の研修を開始することとなった。
27. 7. 21 前期の雇用就農相談会（昨年度は雇用就農情報交換会）を開催した。本年度から2回/年の開催。
27. 7. 26 モンゴル中央県農業専門家派遣事業により、野菜コース竹内亮一准教授と下本奈津子実習助手の2名がモンゴル中央県に8月2日まで派遣され、平成10年度から受け入れている農業研修生の現地でのフォローアップとネットワークづくりを支援した。
27. 8. 6 農業大学校中国四国ブロック教務担当者会議を本校で開催した。
27. 9. 3 平成27年度担い手育成（新規就農支援）研究会～サマーキャンプin鳥取農大～が公益財団法人鳥取県農業農村担い手育成機構と鳥取県の共催で2日間の日程で本校を会場に開催され、新規就農者の支援にかかわる関係者約90名が集い県内の新規就農者の足跡や支援事例を学ぶとともに、情報交換し互いのスキルアップを図った。
27. 9. 研修科に普及展示を兼ねた実習施設としてパイプハウス1棟（302.4㎡）を鳥取型低コストハウスの仕様で新設した。
27. 10. 8 中国ブロック農業大学校研修生のつどいを本校が担当して開催した。1日目は校内見学を行い、2日目は蒜山高原スポーツ公園を会場に中国ブロック6校の学生がソフトボールと卓球で交流した。
27. 10. 15 農業を志向する高校生（2年生）を対象として、就農等に向けた進路イメージの確立に役立ててもらうため就農イメージ相談会を試行的に開催した。内容は生徒の希望する専攻分野別に就農へ向けた情報提供と本校の学生とともに行う実習体験である。
27. 11. 1 鳥取県立農業大学校の設置及び管理に関する条例及び鳥取県立農業大学校管理規則の一部改正が施行され、次の改正が行われた。
新規就農者の育成増加を図るため新しく先進農家実践研修を始めるとともに短期研修科をスキルアップ研修に改める。
①研修課程において実施する研修は先進農家実践研修及びスキルアップ研修とする。
②受講料を徴収しない研修は先進農家実践研修とする。
③就農計画の認定を受けようとする者が受講するスキルアップ研修については受講料を減免する。
27. 11. 全天候型演習施設（大型テント施設タスコドーム）1棟（227.9㎡）を新設し、天候にかかわらず農作業・機械操作実習を行うことができる環境が

- 整った。
27. 11. 5 産業人材育成センター倉吉校の委託を受け、公共職業訓練「アグリチャレンジ研修」を開始した。
農業従事希望者の基礎訓練として農業に関する基礎知識と農作業に要する基本技能を習得できる3か月間の訓練である。第1期生として募集定員20名に対し18名が入校した。
27. 11. とっとり県政だより11月号に「農業の夢先案内人 県立農業大学校」の特集記事が4ページにわたって掲載された。
28. 1. 21 中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会を本校が担当して米子市で開催した。1日目は10校から2名ずつのプロジェクトの発表を行い、2日目は現地視察を行った。
28. 1. 29 第26回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が東京で開催され、作文の部で養成課程1年野菜コース石崎朋江さんの作文が銅賞を受賞した。
28. 2. 1 新たに創設した先進農家実践研修の第1期の開講式を行った。この研修は、就農希望地において先進農家の元で実践的な技術と経営ノウハウを学ぶ研修で、市町村、農協、農業改良普及所等の様々な機関からなるチームが農業経営開始をサポートすることが特徴である。第1期生は2名でそれぞれ北栄町長芋生産部、湯梨浜町ブドウ生産部の先進農家のもとで1年間の実践的な研修を開始した。
28. 2. 23 全国農業大学校等プロジェクト発表会が東京で開催され、養成課程野菜コース2年の東進寛さんが「ネットメロン“フェリーチェ”で実家の経営改善」と題して発表、優良賞を受賞した。本校からの全国大会への出場は8年連続となった。
28. 4. 1 前年度から始まった公共職業訓練アグリチャレンジ科（アグリチャレンジ研修から名称変更）について、農作業の基礎技能を定着させるため、訓練期間を4か月に延長、1期定員を25名に増やす見直しを行うことに伴い、訓練指導員（非常勤職員）1名が増員配置された。
28. 4. 12 養成課程農業経営学科の入学式を行い21名が入学した。初めて海外(台湾)からの学生1名を受け入れた。
28. 7. 中国地方知事会では平成22年度から農業大学校の事務・施設等の共同化について広域連携部会を設置し、ワーキング会議を重ねて検討してきたが、農業大学校は各県の農業施策に基づいた教育を行っており、担い手育成の拠点として位置づけられるため統合は困難との結論に達した。検討の中で生まれた成果は今後も継続することとし、統合そのものについての検討は終了することとなった。
28. 8. 1 鳥取県で初めて食の6次産業化プロデューサー育成講座（レベル1から3の認証講座）が本校を会場に開催されることとなり、12月までの15日間の研修が始まった。受講者は本校の学生・研修生で希望する者10名、一般参加者18名、農林水産分野の県内高校生6名と県職員12名の合計46名であった。
28. 10. 21 午後2時7分鳥取県中部地域を襲った最大震度6弱の地震により本校も大

- きな揺れに見舞われた。人的な被害はなく、当日は推薦入試の日であったが、試験も無事終えることができた。瓦の脱落や水道管、冷暖房配管の損傷、晩生梨「王秋」の落果などの被害があった。水の確保が十分できなかったことからアグリチャレンジ科と研修課程は1日、養成課程は3日間の休校とした。
28. 12. 16 平成27年度決算審査特別委員会報告が議会に提出され、農業大学校について「農業大学校職員の学生指導のスキルアップならびに農業高校と農業大学校をつなぐ連続性のある教育実践ができるよう、農業大学校と農業高校の間に、可能な範囲での人事交流、情報共有など連携のあり方を検討すべき」との口頭指摘がなされた。
29. 3. なし「豊水」の園を廃し、跡地に鳥取県育成のなし新品種「新甘泉」「秋甘泉」のジョイント仕立て用の大苗を植えた。2品種を交互の列にジョイント仕立て植え、受粉作業が不要、早期多収に優れ、単純化した樹形で新規就農者にも取り組みやすいなどが期待される。
29. 4. 1 爲計田ひろみ校長が定年退職し、第22代校長として小林智子校長が就任した。
29. 4. 1 初の試みとして、鳥取湖陵高校の農業教諭1名が指導力と専門性向上を図るために農大へ1年間の研修派遣された。農林技師である農大職員が教育の専門家である農業高校教諭から授業の進め方や教育方法を学びスキルアップとなった。
29. 4. 11 鳥取県とモンゴル中央県の友好交流は20周年を迎え、モンゴル中央県からバグジド・バトジャルガル知事率いる9名の代表団が来県され、満開の桜が咲く農業大学校で記念行事と農場視察が行われた。記念式典では、中央県からモンゴル中央県親善協会と農業大学校に名誉勲章が授与された。中央県知事、平井知事、河本親善協会会長らが、円形広場に桜（ソメイヨシノ）を記念植樹された。
29. 7. 4 本年4月に国家戦略プロフェッショナル検定の食プロ育成講座実施機関の
～10. 25 認証を取得し「食の6次産業化プロデューサー養成講座（25科目）」を開講した。農業高校から51名、一般4名が受講し全員が修了した。
29. 7. 28 モンゴル中央県で開催された友好交流20周年記念式典に副知事を団長とする
～7. 29 交流団が招待され、農大からは小林校長が参加した。モンゴルでは鳥取県が支援している農業・医療施設や日本語学校の視察を行った。中央県農業局や農大で学んだモンゴル研修生の大規模野菜ハウス農場の訪問などで農大との交流による農業の発展ぶりを視察した。
29. 8. 7 モンゴル中央県農業専門家派遣事業により、野菜コース久重祐彦教授が派遣され、
～8. 12 現地での野菜栽培指導を行った。
29. 8. 22 第4回鳥取県農作業安全標語コンクールで野菜コース2年門脇幸律さんが標語「農作業 今日も一日 NO事故デー」で最優秀賞を受賞した。
29. 9. 7 宮城県仙台市で開催された第11回全国和牛能力共進会の第4区（しば系統雌牛群）に農大の「はちこう」を出品し、14県14群中で鳥取県の過去最高成績となる優等賞4席と肋張賞を獲得した。畜産コース2年の近藤あゆみさんがハンドラーを、津村恒士郎さんが補助員を務めた。「白鵬85—3」

- 「百合白清」のスーパーブランド牛の誕生で、鳥取県は7区肉牛の部1位などで総合5位の好成績となり鳥取和牛のブランド力を全国に発信することができた。
29. 10. 7 鳥取県中央家畜市場で開催された鳥取県畜産共進会乳牛の部4区（未經産20—24ヶ月齢）に農大から出品した「シラタマ・アンミツ号」が「優等賞首席」のグランドチャンピオンとなった。ハンドラーを畜産コース1年の吉田隆晴さんが務めた。
29. 10. 12 はじめて保護者会主催による保護者参観日が開催され、農場実習参観と農大職員との意見交換を行った。保護者は13名参加された。
29. 12. 19 平成30年度に県下初のグローバルGAPを梨で取得することを目指し取組を始めた。一般社団法人GAP普及推進機構担当者や青森県五所川原高校山口章校長を招き、「学生が主体性を持って取り組むグローバルGAP取得」に向けた指導方法や教育的効果などについて講演いただいた。山口校長による特別講演会には、学生、農業高校教諭など60名が参加した。
29. 12 鳥取大学農学部編入試験に初めて果樹コース2年生の1名が合格し、平成30年4月に生命環境農学科3年に進学することとなった。
30. 1. 26 第28回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が東京で開催され、作文の部で養成課程果樹コース1年の三谷綾香さんの作文「梨の子～過去から未来～」が銅賞を受賞した。
また、作物コース1年の福留芳洋さんの作文「私の信じること」は奨励賞を受賞した。
30. 2. 1 過疎・高齢化などによる集落営農組織の後継者不足が社会問題となる中、集落外からの後継者を求める農事組合法人が農大の先進農家実践研修生を受け入れ、研修終了後に法人後継者として雇用就農する事例が初めて2組生まれた。
雇用就農先：（農）ファームなかいち（鳥取市河原町）、（農）やまのうえ（八頭郡八頭町）
30. 2. 12 全国農業大学校等プロジェクト発表会・意見発表会が東京で開催された。
～2. 14 プロジェクト発表では、果樹コース2年の笹原洸希さんが「自分の選んだ先に～シャインマスカットに込めた夢」と題して、意見発表では果樹コース1年の三谷綾香さんが「反撃せよ、未来を求めて」と題して発表し、それぞれ優良賞を受賞した。本校からの意見発表全国大会への出場は初となった。
30. 4. 1 時代に即した学校教育とするために管理規則改正を行った。食の安全、労働安全、環境保全を確保するグローバルGAPの実践を行う「生産工程管理」を新たな科目として追加した。4年制大学編入に対応したカリキュラムの統合、名称変更を行うとともに授業時間を45分を単位とする時間から60分を単位とする時間に変更した。
30. 4. 11 養成課程経営学科の入学式を挙行了。新入生24名のうち1名が全国初の技術認証制度である鳥取県スーパー農林水産業士（第1期生）の認定者であった。

30. 4. 13 | スキルアップ研修に、県内で栽培される主要野菜4品目（白ねぎ、ブロッ
～ | コリー、スイカ、ミニトマト）の栽培管理技術習得をする短期研修（各4
カ月間で5期）を新たに開講し、新規就農者育成を強化した。
30. 6 | 畜産課生乳の出荷先である大山乳業が「白ばら認証制度」を行うに伴いバ
ルククーラー（生乳冷蔵保管タンク）に自動自記温度計を設置した。

編 集 後 記

平成9年にほぼ全面的に刷新された校舎は20年の時を経た今でも輝きを放ち続け、その美しい姿で天神野の大地を優しく見守り続けています。

さて、光陰矢のごとしとはよく言ったもので、平成20年に80周年記念事業を実施してから瞬く間に10年間で過ぎ去り、90周年を迎えました。この間、6次産業化等の講義を新たに設けるなどカリキュラムを見直し、実戦力をより意識した、時代のニーズに沿った農業教育に取り組んできました。また、研修課程においてもより多くの新規就農者の輩出に向け、スキルアップ研修、先進農家実践研修、アグリチャレンジ科を設けるなど研修制度を見直しました。

修農会においても、この度の90周年事業を実施するにあたり、20代、30代の卒業生も新たに実行委員会メンバーに加わり、企画・検討がなされました。修農会の10年後を見据えた体制づくりと言えます。

この記念誌の作成にあたっては、下中雅仁第19代校長の御協力により、開校直後の写真、新聞等貴重な資料を御提供いただき、開校当時の学習・実習の様子、学校生活の様子を窺い知ることができました。

今回の90周年記念事業は、卒業生をはじめとする関係各位からの御寄付により行うことができました。時代を超えて脈々と受け継がれる母校に対する御厚情に改めて衷心より感謝を申し上げます。

次回この記念誌が発行される平成40年には創立100周年という記念すべき時を迎えることとなります。

会員皆で100周年をお祝いできることを夢見つつ、今回御支援をいただいた全ての方々に御礼と感謝を申し上げます。編集後記とさせていただきます。

(編集担当 三浦・福本)

創立90周年記念誌

平成30年12月1日発行

編 集 鳥取県立農業大学校
鳥取県倉吉市関金町大鳥居1238
電話 0858-45-2411

発 行 鳥取県立農業大学校修農会

印 刷 勝美印刷株式会社
